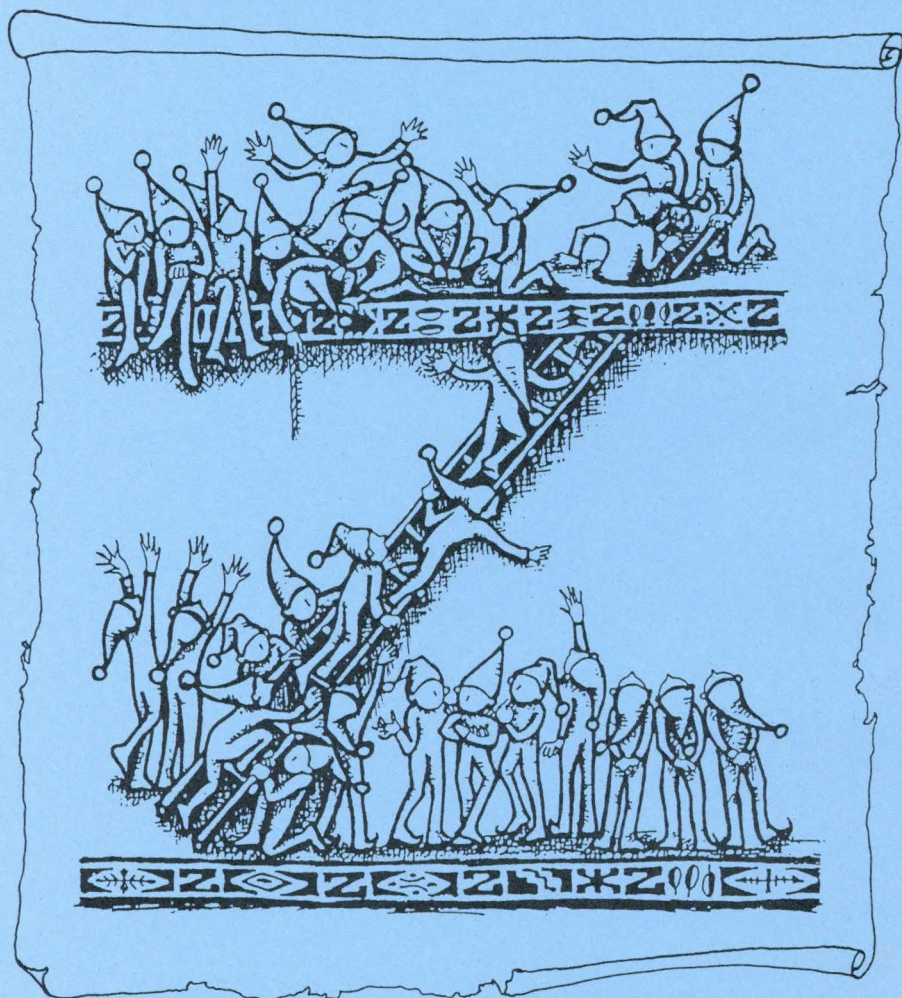


第 14 回

川柳 Z 賞入選作品集



Z 賞選考委員会



川柳 Z賞入選作品集 目次

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
広瀬	大谷	野沢	海堀	本多	木本	高橋	梅崎	清水	西秋	前原	板東	大友	島道	なかは	樋口	柴崎	金山
ちえみ	晋一郎	省悟	酔月	洋子	朱夏	かづき	流青	かおり	忠兵衛	勝郎	弘子	逸星	道代	はられいこ	由紀子	昭雄	英子
仙台市	高松市	青森市	堺市	松原市	和歌山市	西宮市	柳川市	土佐市	八千代市	津山市	香川県	仙台市	青森市	名古屋	姫路市	青森県	神戸市
10	10	9	9	8	8	7	7	6	6	5	5	4	4	3	3	2	1

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
西海枝	福井	みとせ	樋口	戎	柿木	渡辺	峯	坂東	矢島	山本	塩釜	鎌田	和泉	田村	鷺谷	吉田	岩崎
みちこ	陽雪	りつ子	仁修	修	英一	和尾	裕見子	乃理子	玖美子	礫	篤	京子	香	拓郎	美津子	州花	眞里子
福島市	青森市	高松市	四日市市	青森県	大東市	愛知県	大津市	加古川市	東京都	京都市	花巻市	仙台市	滋賀県	土佐市	秋田市	青森市	黒石市
19	19	18	18	17	17	16	16	15	15	14	14	13	13	12	12	11	11

母の骨ひろうて帰る鉦がなる
風花やここに遊里の母が舞う
わたくしも桔梗も狂れてこの世の花
形代のゆるむちははありて水児は
着せ替えて夜露朝露子をかくす
ほろ酔うて亡父の後ゆく七曜や
佇ち眩む姉をひとりの秋にして
十三詣りの子は はなびらはその昔
狂れ嫁かば狂れて死なむとこの年齢を
ならやまはなら山 ははの黒髪さえも



第十四回大賞

「ゆれる」

子の影にもたれて死ぬる日もあらん
激痛や昨日昨日へ戻る 波
木に在れば木に生獄の月抱かな
水縄や母のとしつきよりこぼれ
獄門やこの一族の歯形一列
左手の地獄へ流れゆく月日
ここはいづくか旅路なかばの水を乞う
亡父置きてすすき身の丈急き径かな
生獄の花と永眠らば水ぬるむ
骨肉の音色か半鐘の音色か身を反らし

神戸市 金山 英子

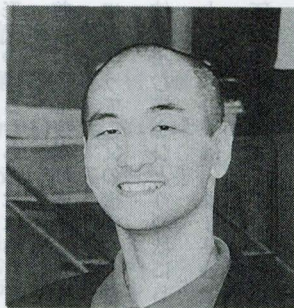
子と哭きし昨日乳房の在りどころ
目に耳にただただ閉ずる十月のさくら
昔日の亡父がゆるりと戻る仮設
秋に死ぬ約束の秋佇ちくらむ
ひらひらと闇に母娘の花遍路
泣けなくて泣かない母娘して ゆれる
吾が骨を誰が拾うかさくら 咲く
慟哭やただ約束の影ひろう
娘の制服に祖国以前のさくら咲く
あ：きれい きれいに焼かれ雪月忌

54	吉田 三千子	名古屋	28
53	八戸 むさし	青森県	28
52	岩崎 雪洲	黒石市	27
51	東川 和子	伊勢市	27
50	斎藤 茂生	青森市	26
49	岡本 恵	水海道市	26
48	斧田 千晴	大垣市	25
47	乙黒 初音	山梨県	25
46	後藤 理恵	和歌山市	24
45	普川 素床	市川市	24
44	芳賀 弥市	仙台市	23
43	河瀬 芳子	高槻市	23
42	菊地 俊太郎	東京都	22
41	横村 華乱	柏崎市	22
40	斎藤 はる香	小樽市	21
39	田代 時子	宮古市	21
38	松永 千秋	福岡県	20
37	伊藤 紀子	苫小牧市	20

55	加藤 かずこ	札幌市	29
56	あべ 和香	花巻市	29
57	福田 文音	青森市	30
58	福力 明良	岡山県	30
59	長井 すみ子	福岡県	31
60	野村 禎子	北海道	31
61	高橋 蘭	札幌市	32
62	宮本 めぐみ	仙台市	32
63	野々 圭子	和歌山市	33
64	渋谷 美和子	新潟市	33
65	島田 小吉	東京都	34
66	岩間 トキ	網走市	34
67	玉木 柳子	郡山市	35
68	大橋 政良	砂川市	35
69	辻 スミ	和歌山市	36

選を終えて……………西条 真紀……………37

作品の燃焼度・結晶度	吉田 健治……………38
そして問題意識……………	寺尾 俊平……………39
比喩のきらめき……………	岡田 俊介……………40
椿の実を推す……………	橋高 薫風……………41
ある選後感……………	片柳 哲郎……………42
選後感……………	八坂 俊生……………43
個性を求める荒野へ……………	佐藤 岳俊……………44
選後評（あるこだわりの背景）	酒谷 愛郷……………45
難しい価値の数量化……………	尾藤 三柳……………46
幽幻……………	金山 英子……………46
叱ってくれる先輩と家族……………	柴崎 昭雄……………47
選考結果……………	……………47
Z大賞・風炎賞受賞者一覧……………	……………50
表紙絵……………	岩崎眞里子……………50



第四回風炎賞

青森県 柴崎 昭雄

人抱けば人のぬくもり菜の花盛り
閉ざさるる柵のすきま花日和
晴れた死体がつるんと喉を過ぎゆけり
散らかした桜吹雪や わが裾
人形のうなずく記憶さくらの記憶
花図鑑はげしく抱擁するものよ
青いけものになりたる兄とおとうとと
かけふみをして昏れ残る父の踝
かげろうの椅子よ骨肉置き去りに
けもの坂夜の家族の石あそび

父原野手毬まっすぐころがりて
蠅よ父これまででもこれからも
蟹青きまま横たわり月ひとすじに
無明坂ころがり来るは柿の種
墓標かな かすかに蟹の影ゆれて
りんどうのごとく呼吸継ぐ夕昏れ坂は
頬杖に紙の月など浮かべけり
動脈静脈道化の月は褪せゆくか
這いだして孤影しずかに雫せり
闇ばかり見て来たじゃがいものかたち

母の寝息よ 霧の芒は身の丈に
淡雪しきり わがへその緒に火照るもの
幽明の生身ほのかに振動す
雪崩ゆくものよ人形がよくしゃべる
青き魚のうろこ剥がしてつきぬもの
吹雪あわ雪ひとかたまりの神抱いて
群青の影するすると取りそこね
雪降れば瑠璃色の咽喉もつ身なる
一列に何の影なる冬の斧
凍天はきわまり貌の白き輪郭

姫路市 樋口 由紀子

鮎三つ類ばる新宿百人町
背泳で近づいてくる父母の土地
体臭や入道雲は沸き上がる
一年前に失くしたものに雛の首
うずくまる幼女が見える向こう岸
正座して筍の皮はいでいく
喉元に脱走兵を匿って
霧ふかく身体の中に異郷あり
それぞれの記憶が沈む砂糖水
秘すことの怖さにセロリ噛んでいる

一面に小舟の浮かぶ昼の夢
あわただしく魚がのぼってくる背骨
カリフラワーを固めに茹でて逃亡する
ビートルズの曲が流れる革命前夜
雨を待つ家族でいつも移動して
三月に追いつめられる霊柩車
姉たちが黄ばんでいく崖の上
ふところの舟を出すのを忘れていた
胸底にまっさかさまのお人形
父の顎は物置にあり十二月

名古屋市中区 なかはられいこ

君の名を書けば三月 手暗がり
如月の空をあしおと降りてくる
昔小さな祭りがあって君生まれ
パレードが通ったあとの泥寧や
ただずめば私もしくする 緑
窓ひらく古い映画を観るように
夏草よ わが一生をそらんじて
りばいばる身体に海を感じたら
この傘は夜の匂いのままひらく
ときめきよ象形文字の鳥飛ばし

冥王という天体があり枇杷実る
秋が来る銃を構えるポーズして
柚子の香や暫時孤独という遊び
こうこつと柱時計がひとつ打つ
たった今切り倒された樹の匂い
テロップの地震は遠く林檎剥く
足もとに鳩群れふいに未来など
玄関のドアいちまいが国さかい
ふふが座る微妙なバランスで
悦楽やラップの芯に巻かれゆく

後頭部で実るみずみずしい果実
考えて進む考えて進む先頭の蟻
家族が眠る 水底の景色みたい
まほろしの蝶いて曇る窓ガラス
ふかふかと闇 わたくしの両隣
ころも卑しみ虫歯の穴の今治水
たいくつな景色のなかの赤い蟹
鉄骨の塔となり果てる いつか
くつきりと影ある蝶は憎きかな
唇が ゆめ と動いてすべて夢

青森市島 道代

満開の桜を想う雪の橋
吹雪かれて絹より細い東ね髪
まだ底があるのだろわか雪まみれ
越年の冷凍みかんあたためて
還暦の壺いっぱい氷割る
枯菊の影どこまでもひきずって
掌に掬うこの木洩れ日も風になる
芽の出ない鉢を抱えて日をこぼす
漕ぎだせばたちまち沈む舟を掌に
闇にむせながら蛍の灯を探す

凡 日

コスモスに呼ばれたよ短い返事
公園で一緒に欠伸してほしい
交番を通りすぎると今日になる
陽は西に沈むと思う定食屋
公園に悲しい犬は来ていない
裸婦像のある階段を一步二歩
人をつつ丸い荷物をぶら下げて
発つ駅が道路マップに見当たらぬ
新聞に包んで家を捨てにゆく
こうもりで突ついて廻る雨の家

セロリ噛むまだざわめいている水面
ひまわりを散らし続けている河口
家族皆雨期を抱える花茨
持ち帰る雨雲ひとりきりの森
血の濃さよ錆び付きやすき梅雨の窓
母がまた泣いているのか水漏れる
素裸のわたし夕陽に泣きながら
たんぼの声霧になる霧の道
遠雷よ石積み歌は絶え絶えに
夕焼けを食べつくしても風の駅

窓開けて街と枕を陽にさらす
自転車をこいで大きな町にする
鶴がいる拾い忘れた湖に
纏まった雲たゆとうている布団
蟹食らう死亡広告隙間なく
鯨鯨の吊し切りなら金木町
おじさんに伝説があり皿洗う
天才はピカソを発見していない
遅い葬式饅頭ではあるが
クリスマスツリーになろうと灯るのか

仙台市 大友逸星

小指の爪で礼拝堂はがす
どんぐりを落とし続ける貧しくて
僕を見る満腹そうな顔ばかり
駆け込めば駅華やかな水不足
種屋からホロコーストの根がとどく
植木屋に伐り落とされて猫の前
バラ線の奥に尿瓶が横たわる
老いてゆく名画館まで旅をして
血液がほしくて並ぶ兵馬俑
欄干に両手をついて河を待つ

香川県 板東弘子

桜三里は皆根をもつ父の忌よ
湖面一輪故郷の月の落ちにけり
故里を遥かに我が胸中のかすれ笛
土は乾いてちははは遠き風衣
菊を嫌うて吾が懐の菊まみれ
風をこそせば精霊かえる僧の指
踏絵以後翼を閉じたまま日月
風鈴吊るす西より西に傾いて
絮吹いてふいて女の凄しかり
私を拾うてのひら熱き魂あそび

田の土にまみれて亡母の絵を描かな
石ひとつ動かさざりき我が軀
黄菊白菊両手で小さい灯を囲う
花野曼陀羅赤い錠剤ころがして
我を見つめて飽くまでも沙羅白し
ポケットの蝶をしばらく羽ばたかす
恋唄にゆらり傾く月の暈
街路樹が何本狂う葉芽花芽
指鳴らす寒い線路も向日葵も
ブランコの仏と秋の話して

津山市 前原勝郎

疲れやすき生命のゆくえむらさきに冬
忘れたき過去には触れず深き呼吸
恍惚でしようか仏滅とすれちがう
おんおんと確かに聞こゆ骨のうた
いのち透く露草の葉の重なり
返り花ほんとに淋しい元気です
月光も枯るるか裏返しみる胸中よ
肋を貫くコップの水がとても凶暴
どうしても影が他人になリたがる
冬が来るみぞおちまでも怒濤して

胎内の暗さでやすらぎぬ白い時間
静脈透く指から指へ流れる冬
三百六十度の哀しみ抱いて今朝の冬
哀しみをつなぎ冬夕焼けを越えて
うしろ指の指のかたちに冬深む
望郷いろの月なりきゅと抱きしめる
淋しいから月光浴びにゆく故郷
どの道も死後につづきし静寂かな
抱ききれぬ歳月深し死より深し
盆地暮れて今とやがての死をおもう

よろめいて歩く一歩よ秋散らす
落ち葉踏むわたしの悲鳴聞きながら
秋草の押し花となる陽の陰り
散り際を重ねる月の傾きに
道尽きる兆しに刺がすいのこずち
猫柳悲しみをみな灯らせて
雪やまず独り綾取り果てもなく
しばらくは仮の眠りの金魚鉢
空を吸うかごめかごめと夏めぐり
崩れゆく紫陽花ひとの遠くなる

雨の昨日に雨降りつつき孤がひらく
遺書いちまいほどの遊びごころとや
書きかえることはないが遺書は鉛筆で
病いふたたびくちびるに降る寒い月光
手術日決まるとどめのような雪降り来る
病むは哀し冬眠のごとねむるわたし
天国にいるようなりいちめんの椿山
冬蝶一匹死ぬ日決まらぬまま生きて
微熱一日背骨鎖りのように垂れ
病窓満月生きるという戦いは

いわし雲めくれれば只今準備中
コンピュータの故障で空が青いのです
月光をつくっているステンレス工場
戦争のない空自転車の上
不思議な平和を見ているアドバルーン
冬の雲正法眼蔵熟読す
地球から洩れる水の音 電車の音
吊革を放すと地球から落ちる
パソコンから出てきた人間の指先
オンラインにならぶ埴輪の妻たち

青島知事誕生 これは帝王切開
住専の担保の木守柿 ぼかん
やすしが死んだ 西成の野犬の舌
ビザパイに電話つながり 護憲改憲
種は木に残留孤児らさくらさくら
パチンコのタマ国道をころがった
ボスニアが炎える リモコンのテレビ
原爆図の水をとりかえねばならぬ
戦争と俺のあいだに国語かな
浅沼稻次郎は居ない 鯨のフライ

向かい合い深夜の海をかたちどる
猫の死も多情なる日は美しい
緋けば木が燃えはじむ韻律や
再生の夜風神に名を呼ばれ
夏枯梗枯れてあおお指戻る
果樹棚にやわらかき手も熟んでいる
残月や朱に殉ずる日もあろう
封印を解く夢想家の口元へ
蒼球は崩れ続ける君の肩
生菓子のひとくち赤が沈殿す

鳴き蟬にどっと抱かれる亡父といて
向日葵の一角暗し神が立つ
芒揺れ月光揺れるあれは人
極出て今夜氷色の卵産む
暁の父らに深い縄の痕
言霊も月も密なり四肢遊ぶ
広辞苑薄暗がりて人臭き
風の未来図花一輪と他界する
秘すことや唇神の鋳型して
恋人の陶花のごとき肪浮く

八千代市 西 秋 忠兵衛
ボールを蹴る音 少年は液体だ
鍵かけて紫陽花を出るかたつむり
吊革で埴輪のポーズなどできる
めし食ってゆっくり走ろう東京都
露天商の軍手がひろうごはんつぶ
トラックのうしろの闇は国道です
工場の風呂にくるぶしから入る
伎楽面外すと俺は居ないだろう
湯豆腐に屈めばありふれたゴリラ
平成を八年生きて笛吹きケトル

硝子文一枚夜をくし削る
兄妹樹液が匂う日に逢いし
人は照り我は落ちゆく花火の底へ
菜の海を沖へ行こうと蛇の子ら
亡父居るか真上から見る緋睡蓮
水牢をぬければ一族の眠り
何処からか来て青蛾なる憎の書よ
湿原を人は魚形で彷徨えり
冬の河今を生きたき先人ら来る
憶れは風葬寂しき肺達へ

土佐市 清水 かおり

奪われし歌留多愛とはこのような
我が死後も竹の根地中貫くか
げんげ田の隅でゆっくり牛になる
ひとすじの冬日の下で洗う傷
水菜ゴクリ真昼の暗闇で
アルミ箔に瘦せた哲学など包む
血液型はA型星座傾くも
坂道を来る童貞の歯の白さ
喧嘩風風に響かせ男の子たり
母に借りた時間で花を植えている

尺玉の尽きたる空に落書きす
雨季始まる玩具の電池熱を帯び
来し方を綴る西日に苛まれ
黙祷の鐘は水底まで届く
鯛の粗強火で煮炊く夏その日
劣情のどこか氷菓に舌染めて
仏壇の後ろで水の音がする
毛虫焼くにも仏壇の火を借りる
はぐれ来て花火の群れに身を預く
がらんどうの胸と共鳴する花火

柳川市 梅崎 流青

祭終え土葬の村の深き眠り
鳥墜ちた空に暫く光りあり
待っている便りレモンはいつか実
梢火尽き仏がふつといなくなる
どこかに秋佛の眉間より兆す
田一枚引き擦り軒を低く住む
逡巡の果ての手紙が濡れて着く
蛇の舌動き真昼を暗くする
哀歓やふくの卵巣喉にあり
蟪蛄が契る聖なる音させて

西宮市 高橋 かづき

一月十七日なにを食べたか記憶なし
生存確認の電話のベルが鳴る
被災者と呼ばれてしまう自動的
震度7家もわたしも生きています
外人みたい家の中で靴はく
懐中電灯いっぽんの夕食
水のある所につづく人の列
髪なんて切ったなどと母がいう
水は出ぬ昨日も今日も明後日も
日曜も水くみに行く休まずに

立春の電車に乗っていくお風呂
被災以後やたらと欲しい甘いもの
生きているわたしに届くはがき読む
さし入れにうがい薬が添えてある
わたくしを励ますようにお湯が沸く
震災のあれからスカートをはずす
水道もガスもないけど西宮が好き
さくらめーるやさしい人のやさしい字
四十一日振りに水道管を走る水
ああ雲だと思えばらく振りに見る雲

美しく青い火 二月末日ガスが出る
これからはいいことがある新キャベツ
映画にでも行こうかそんな気になる
いかなご炊くいつもの春と同じように
震災を忘れるためのコート買う
税務署で見せる被災者証明書
一度しかこの世で死ぬ桜咲く
震災の死者ひとりひとりにある名前
亡くなった人のふんだけ枇杷熟れる
被災から始まるわたくしの時間

和歌山市 木本 朱夏

絶叫の固まっている椿の実
放置自転車の中に歪んでいるわたし
片しぐれ傘もおとこも還らない
バラ買つてケーキを買ってまださむい
小便小僧の肩のあたりへ目を逸らす
ビニールの傘のかさで捨てられる
仕方なく湖に石投げて来た
いつも赦し許し濁ってゆくばかり
微笑みのかたちにシュークリームが焼ける
歯の治療やっぱり恥ずかしい時間

キコキコと自転車漕ぐ逃亡者
沖に出たなら傍観者になるう
テトラボットのひとつはきつと母たろう
ひまわりの群れ匿まってくれたのか
ラムネ飲む男の喉の海鳴りよ
青臭き息を放ちて夜歩く
まなうらに蛍の灯る危うい夜
私刑かもしれぬ枕がふたつある
いらくさで編んだ冠ならあげる
曖昧なきのうが沈む魔法瓶

わたくしを跨いで猫が出て行った
目覚しが鳴って此の世に蘇る
生ぬるいトマトを齧るヒロシマ忌
咳込んで古い言葉を吐き尽くす
死者を送る花が競っているではないか
時々うしろ姿を確かめる
ふらんすパンほどの頑固は持ち合わす
人來たり人去りわたくしに西陽
総身に蔭を這わせて生きている
しっかりとルビ振っておく現在地

松原市 本多 洋子

ルオーもムンクも宙吊り三宮駅前
片足ひきずるポトアイランドの鴉
ケミカルシューズ圧死 蝶結びのまま
明日は見たか横軋道路の橋桁から
からし色の落丁がある真昼の駅
四角い空の中で孵らない卵
海が光るから大切に言葉
色のついた空気を速達で送る
破れた地図に残る落日のかけら
鎖をすり抜けたのは多感な蜚

ガラスの蝶の透ける血の道 海へ海へ
ガレを透せば枯蟻の痛む関節
秋夕焼 海に佇むガラスの人魚
ひと夜茸 髪のうしろの硝子の闇
夢の夜の雪人形の帯ほどかれ
猫語を聴いている如月の闇
風船の青を透せば光る音階
鯨笑うている餓鬼草紙の片隅
呪文唱えて凶鑑の蝶をみな放つ
舟形石棺 蝌蚪の緑を遊ばせる

寒夕焼け亡夫と海を眺めしこと
卵の花腐し追伸一行が重い
決心がついた葉先のてんと虫
手花火の闇に縫れる姉いもうと
花柗榴 身内を抜ける風いくすじ
ボタンかけ違えて夕日を見る姉
芍薬の白透きとおる輸血回路
夕焼のブランコに乗る冷凍金魚
姉は旅する積木の貨車を揺り起し
夢をラッピングして銀河鉄道

堺市 海堀 酔月

補聴器に神戸の骨の折れる音
鳥獣戯画燃える 戦災から震災
世紀末のオブジェ 国道に蛇の抜け殻
空き壺を抱える舌のない人形
校庭のテント いのちを移植する
動詞が主役になる関西風難民
デフォルメの街昏れる ジャズの残骸
西天に祈るガラスのような朝
伝説を一つ殺して日がくれる
即効性のあることばを飲んでめしにする

みの虫の瞑想尺取虫の行
神を欺し神に騙され借り貸しなし
骨は拾うな煙りの方がよくなんだ
風船の落ちたところに荷を下ろす
ハッケヨイハッケヨイと結果を越える
急行の停車駅だけ数えよう
自意識をペロリと舐めるカメレオン
視野を遮る赤は挫折か夕焼けか
四三二一 鐘が鳴ったら火を消そう
拾ったものを捨てて捨てたものを拾う

またお前かと言って神様が消える
流暢なことばで血刀を洗う
春は黙って背中への傷口を見せる
ゆっくり味わう疎外感の滋味
使い捨ての声でバンザイ三唱す
他人の耳を繋いで川幅を計る
靖国の鳥居を落るシマ帰りの
裸婦像の亀裂とわたしの関係
空き缶の上にもひとひらのほなびら
寓話吐き尽して灯台が傾く

連作 霧の疼みにーオウム残像ー

児はひとり黒い太陽見つけて消す
からみ合う人影 影に唄聞こえず
幾万年の眠りの中の富士の渦
サティアンタの夕陽ににこりゆく祈り
背の雨滴憎むことのみ悟りとす
空中浮遊 足跡を消す息つめて
千の眼と千の耳にて死を畏れる
死後さばかれる空蟬の眼の輝きよ
ちちははの血を断つための修行にて
唇の朱のひとろを毒ガスに

黒髪はなびかず ほどかれる宇宙
少女老いてハルマゲドンに裸身をさらす
児はひとり幼い自慰をくり返し
一本の樹は一本の滅びを持つ
日本という具体の海の波の苦さ
人を殺すこともまぼろしパソコンの
ばかなテレビばかな缶蹴りして騒ぐ
大学の屋根に被さる覚醒剤
自衛隊員自衛するもの問うなかれ
国家とは陰莖に似て「ねばならぬ」

議事堂にそしてそしての沼広がる
はるまげどんアサハラよりもフランス・シラク
「法が裁く」宗教があり朝があり
祭りは終り 一本の銃眼らぬまま
遣伝子守ろうとする神の爪
霧の疼みに滲む乳房を吸いつづける
精子いっぴき染まる夕陽の雪崩のなか
サティアンタに朝はじかれて不眠のはあきな
溺愛の太陽が射す模様の死体
児はひとり指を噛むとき涙ぐむ

青森市 野沢 省悟

山は黄に地蔵の舌は石榴色
銀杏焼く山家鬼子の生まれたか
畑の芋細る日に日も山神に
木の葉積む障子父らをよび寄せて
不老柿の下因習の蛭局耳
猫おとしきらきら猫の行方不明
手甲のぼこぼこ骨の鳴る冬木
冬の掌に無音の疵があり菩薩
花の名を手品のごとく冬老婆
花びらを食べては覚ゆ一木一草

焼け野原の庭石に冬 婆の婚
樹の漢ぶらゐ無頼と雪が降る
軀を縛る樹で風の歓喜をやり過ぐす
少年で在ればこそ杜 木の実降る
梅の木をたたんで昇る月の兵
ふり向けば赤児ふり返れば妖婆
妖怪の棲む杜なれば空中ブランコ
杜も戦国小面被れば頭痛せり
夜猫昼猫おどおど杜の鈴打たん
埋没の古銭と老ゆか杳い杜

高松市 大谷 晋一郎
四十四に父は何方 柿若葉
瓢箪を割るまっ黒な父の記憶
貧しくて笑う川原に家ありや
日々細る覚ゆは白い蛇の家
今昔の沼地わたしが浮いている
狐火を連れてわたしの沼隠す
五人寄り夾竹桃の白い盆
団子盛るははの拳の大きさに
ひまわりの首の細きよははの盆
月の墓祖母の産みし男子なり

仙台市 広瀬 ちえみ

知りたくない知りたいその黒い箱
門ごとに刃物が立っておじぎせり
滝音に占領されている体
すきとおる皮膚一枚に包む湖
道遠くおやつは食べてしまいきり
薬買う顔が鏡に大映し
大声で不在のドアを叩くなり
迷いこむ水の匂いのする部屋に
一本のからだを立て掛ける隙間
じっとしていよう手足が生えるまで

ジャムを煮て河馬の奥さんしています
雨の日は尻尾の手入れなどをする
爪切ってもらう檻から手を出して
天地無用 かみなり坊や眠る箱
庭に来る産んだおぼえのある小鳥
満月を湯舟に浮かべ遊ぶなり
標本箱の青い翅もつ これが母
別々の部屋で見ているポプラの樹
冬のプールに河馬を待たせているんだよ
パイ焼けば雨の匂いの人が来る

つっかけてこの世にふらり出てきたが
「一緒に」と言われてジェットコースター
戦場の熱いカレーを食べている
飛んでいるうちに忘れる父母のこと
からっぽの巣箱があつて宿にする
着い耳立てるとこまでも砂丘
暗がりの水栽培の呼吸をする
雪の降る前の触角しておりぬ
家裏に積まれたものを一掃す
五線紙に並ぶ黄色い水着着て

母 図 鑑

直線はみな曲げられて都市の葬
存在の数だけ 茶碗の数だけ
月の羽虫のものはやこれまでなるうなじ
添いとげしあわれ曙光の頭痛部屋
花の散る音に似たるや人の去る
昨日死す 明日の分は手もふれず
この世まるごと葦の虚空へ堕ちてゆく
絶叫の大地鎮めん北は雪降り
夢想する塔あり銀河串ざし
影を拾う月観音の掌の長さ

ほうたる来いこの世仮の世灯を点せ
雨の日は蕾のように膝抱いて
絶望はまだ絶望を知らぬ闇
咲き満れて人も桜もこの世を出遇う
子を宿すその日が母の誕生日
母というだ円の内の冬はこべ
何故、何故と緋蜻蛉の中にいる
泣いて哭いて大きな円を育てしか
破れ傘きつとわたしも負け上手
海を行くひとひらの雪瞳に痛し

青森市 吉田 州花

香を焚く時の流れの外側に
蠟涙の以後の沙汰なし細雪
別れては輝く雪をたまわりぬ
引き潮は月まで一期の雪景色
響くる蜘蛛とわたしとかすかな魚臭
深深と天おりてきて吹雪いている
冬帽子こんなに私寒いのか
雪の街みんな縄とびに疲れ
雪原に芒埋もれてなにごとぞ
人ひとり何なく埋める雪になる

鬼蜘蛛のむくろ雪穴深く掘る
身を投げるには今夜あたりの雪の高
ゆず湯かな乳房の浮力ただならず
雪の褥に椿一輪咲かそうと
雪さんさんポストへ駆けるとき少女
もう一度さくらあと百日で消える雪
ひとり身の爪の弱さをなげいても
冬さうらある日の汚れやすき雪
着ぶくれて苺ショートを買う旅へ
雪まろげ時々電話とりながら

螢百匹吹雪へもれる窓あかり
研ぎ終えた氷柱輝く南窓
雪ななめひとりの破魔矢求めきて
わたくしと空のあいだに雪うさぎ
如月の雪は宴か息もつかせず
蹴つとばせたたとえば雪の厚化粧
ぼたん雪請われて誰の傘に入る
類焼の準備とこのえ月の出を待つ
干し草は母の香りか雪の墓
かむろ雪やがて重ねた年月に

黒石市 岩崎 眞里子

雪止んで我が寂膜に螢の子
南無や南無この子冬の子若菜の子
経文一文字・鱗一枚・今羯諦
飯の世に忘れな草の頃ありて
傘閉じて螺旋を滑る思考船
紅絹の空樹影いよいよ母に似る
百兆の細胞、少年大宇宙
遣伝子のところで君に出遇いたい
みんな母みんな吾が子と母図鑑
とおい晴れあれは明日のことだろうか

秋田市 鷺谷 美津子

愛されて時々まるくなる背中
父と娘が同じ寝相の午前二時
お互いにテレビが消せぬ倦怠期
ガソリン満タンふいに失踪したくなる
まな板のごときラブホテルのシート
本棚がいつかいつかで占められる
「じこけんお」とルビを振りたい宿酔
カーラジオ気楽な旅の友とする
雲の影から舌を出されたのは私
週休にやっとなが家を立て直す

恨み言にふわり千切りキャベツ乗せ
空の近くで吹いてる風に憧れる
寝ぬ子をあやす言葉が殺気だつてくる
「失踪マニュアル」いつも読んでる友がいる
映画館へほんの小さな一人旅
子の寝息浴びて私も深海魚
無添加の男たやすく消化され
学問ノススメ私のために説く
小さくなった服のはかなさとおしき
勝ちたくてこんな可愛いずるさする

土佐市 田村 拓郎

背に見える早熟な優しさは不敵
葡萄酒を注ぎ燃えるは僕の肉
不健康な僕も連れてく夏の太陽
草いきれ玩弄の罇少年に
昨夜見たサーカス小屋の湯気に消え
もつともつと石投げる手が燃えている
鈍色の蛇口に覗く二十歳の未練
傷ついた翼が僕を威嚇する
ひとりふたり夜毎鳥居は起こされる
露になり色付き瓶に溶ける夜

色のない動物走るぬりえ帳
ブランコに小さな影絵浮き上がる
風の晩川に流した小さな灯
潮引けば瘦骨尖るこの夜明け
汚れた身赦す真つ赤なお月様
雪洞が消えるとも赤い影消えず
影踏みは優しさ今は月の夜
水鏡きらめき落ちる花片の夢
少年に化けて一途に悩む夜
さんかんの残り実を摘む白き指

乱れ髪きららの道が君の瞳に
稲妻の契り煌く海は知る
月が行くどこまで熱くなる五感
まばたいていよいよ深い屋の夢
薄紅が螺旋に落ちて染まる肌
赦されず月は蜚を愛撫する
落日の朱き煽情蟬が消し
逆さ月揺れるままある影ふたつ
抱いたる椿しへの黄覚醒す
散っていく夢を集める夜のバス

滋賀県 和泉 香

駅で買う小さな旅の時刻表
地下街の通路でできる雨やどり
置き手紙少し太めのペンで書く
ブランコいで空を行ったり来たりする
気球など降りてきそうない天気
弁解しない私可愛くない女
ぼんやりと水着のあとのある背中
イヤリング揺れる小さな音がする
一切の私情は捨てる避雷針
肌色のやさしい色の傷テープ

本の背がわつとこちらをむく本屋
ケーキを食べるしあわせそうな顔をして
さるの目をすなおな水が落ちていく
大事な車ずいぶん掃除していない
豆腐切る肩の力をぬいて切る
郵便番号失礼のないように書く
いつだってポストの口は開いている
旅行から帰ると待っている仕事
ちゃんとした梅雨にはちゃんと雨が降る
去年より大きくなったいちちょうの木

泊って帰る約束の海の家
受話器にはいつでも風が吹いている
歯医者さんで力いっぱい開けた口
ともだちはいらない暗い部屋にいる
大事な人にかわらないはず午前二時
力いっぱい閉める悲しいドアの音
離婚する楽しみがあり生きている
目を閉じてつくる私だけの闇
スイートピー咲いてわたしの誕生日
包帯を巻く傷口眠らせぬように

仙台市 鎌田 京子

すれ違う風のかすかな摩擦音
一滴の朱をしたたらす神無月
大切にしようもらった手も足も
ガラスケースの中で鳥の息をする
卵抱いている長い時間帯
スポットライトの中の晴れときどき砂丘
わたくしとペットボトルの未来など
水色の風を感じて落葉す
輝いていないと誰もいない海
海までは遠くガラスの割れる音

紙コップほどの軽さよ人が逝く
わたしより淋しい電柱かもしれぬ
消えるために打ち上げられている花火
紙飛行機がストンと落ちるプラトニックラブ
郵便屋が転んだわたしも転ぶ
明日散る薔薇と約束してしまふ
あじの叩きをつくる哀しい背中
クリーニング屋に忘れたままの春のシャツ
空気に触れると壊れてしまう言葉
座り続ける空っぽの胃袋と

音消してブラックホールまでの距離
箱の中に閉じ込めておく光るもの
ふつつつと大人になってゆく汚点
ピアノ連弾 黄の点滅を繰り返す
たっぷりと盛る落日の毒リンゴ
幸せのレッスン少ししましようか
失意の底で煮込みうどんを啜ってる
一輪差しにひょいと私を活ける
もう何も失くすものがないのひらよ
そしてまたいつものように繋がる

まぼろしの方舟来る春のレクイエム
 静脈は沼へと延びる花の冷え
 ポケットの干潟彫らむ誕生日
 漆黒の骨吐き出せば花の雨
 桜桃忌一对の闇もつれ合う
 水打てば影引き締まる魚座かな
 水槽に溜まる昭和の蟹気楼
 向日葵群れる 真言の一つや二つ
 問われれば残夏の風と答えよう
 夕焼けに毀されてゆく秋の蝶

切岸で回すエンドレステープ
 疣毫飛べよ終わりの世のように
 秋霖のゆっくり歩きだす仏
 切株に不定愁訴を積もらせる
 櫓の火を囲む独りの祭かな
 地平線愁いの驢馬となりたるを
 くれないの水になるまで蛇行する
 芒野のいのち溢れる風祭
 燐寸擦る貝の毀れた時間帯
 抛無くくちなわの口になる

花巻市塩釜 篤

狼は夜来る漣に乗って
 腐敗臭拡散 穴は邪に
 砂丘茫茫 冠狀動脈裂ける
 青インクボトリと神を滴らせ
 パントマイムと静かに暮れてゆく雪野
 積もりくる雪へ嫉妬のありったけ
 悪しき血は静かに眠る鎌の月
 漆黒の雪ひとひらと暮れ残る
 縄文の血が地吹雪を這いあがる
 暁の旗を立てんと行く雪野

京都市山本 礫

生きていてほしい 時雨でいてほしい
 土蔵消える 父を売ったか母を売ったか
 森を出て ガラスの街へ帰へりゆく
 焼けどした数を喋らせるのですか
 おろおろとおどけて回る独楽もわたしも
 苛めてくれた人も住所録から消えた
 忘れよう 空気が流れ去るように
 化けられないけれど被らう冬帽子
 存分な菊に包まれ 柩出る
 西部劇が終ったように忘れゆく

討たれやすい高さにいつもいるわたし
 アンパンからもらう情けのようなもの
 枯葉の道を蹤いて来るのか 蹤いて来るのか
 安酒にぐらりと泳ぐ意気地なし
 クラークゲイブルより年上になりました
 一拍も 二拍もずれて冬といふ
 ポストへ散る落葉よ旅に出たいのか
 序列からはずれて階段を下りる
 冬だなあーカルメ焼など思いおり
 あの人のもこの人も死に上手なり バラの花

風葬 化野 二る石段
 舌下錠に 男のやすらぎなんてない
 一直線という さすらいがあるばかり
 薪能 男も焼いて下さるか
 昼には昼の劣等感を抱いている
 何処で果てるのだらう 寒々と地酒
 遥かな 遥かな償いがある耳の底
 桑の実食べし大正男のいまもさすらい
 天使にはなれないけれどボランテア
 梵鐘の疣 いくつある 冬の寺

東京都矢島 玖美子

神戸激震 大事な人が揺れている
 春に神戸で逢おうと書いた年賀状
 東京の雪のふつもなさの中
 梅ひらく目深に被る黒い帽子
 咲く花の色とりどりが痛い春
 忘れてはいけない人の墓に雨
 嘘のない男に疲れはじめている
 針一本落として君の部屋を出る
 金網のはるかむこうに見える桜
 死んだ者が勝つか負けるか死んでみる

誰にでも好かれる人よさようなら
 踏み台がぐらついているいつもいつも
 大声の人と会いたくない五月
 病院の隣花屋は花を売る
 子を生まず風のない日のこいのぼり
 まだ白いあじさい雨を待っている
 走梅雨 恋に作法のあるものか
 雨あがりの光のような愛し方
 男の家の臆病な黒い犬
 訊かれたら答えに困る鍵がある

偏屈な老人になるのが望み
 セロリ飲み下す親には言わぬこと
 三十三歳目を外らさずに鏡見る
 さやさや笑うあなたの妹になれば
 昼の月人を拒めば拒まれる
 空の青 たしかなことは何もない
 皮膚炎が治ればきつと恋かなう
 懐かしむ昔はもたす前に海
 横殴りの雪に直立するしばらく
 神様にもらった傘をさしている

加古川市坂東 乃理子

待つことをおぼえて犬は犬となる
 見ているとなぜか涙の出てる絵
 言語障害という小部屋に閉じ込める
 美しい病院の窓 鉄格子
 捨てられた失敗作の野菜たち
 放心のままに流れてゆく時間
 父母は棲むよびだらけの家に
 満月で仏滅だった大地震
 余震来る 父どこにいる屋根にいる
 父は佇む 我流の補修工事終え

被災後はケチと呼ばれて生きてゆく
 春の中粉塵の街ただ白し
 新しい胎動なのか地響きは
 私の爪伸びきってはや四月
 少しずつ癒える大地と私たち
 心身重し三色すみれ枯れてゆく
 歩調がびったり老犬と老人と
 草焼きの中にひばりの卵かな
 被災者の三兄弟が飼ううさぎ
 ゴムひもが伸びて私の秋になる

誕生日 他人と一緒にいる疲れ
 無意識にのぞいてしまう冷蔵庫
 死ぬ前に逃がせなかったかぶと虫
 埋め墓の跡地に家が建ち並ぶ
 見つめるととんだん杉の木は伸びる
 髪の毛に七三分けを覚えさせ
 伸びるのはもう止まったか象の鼻
 木枯しに猫ふくらんでふくらんで
 大滝秀治の顔で生まれてくる子犬
 首長く伸ばして私の飛翔

愛すべしつむじが二つあることも
鳥の巢のまるさを忘れそうになる
二ヶ月の淹に抱かれて抱きかえし
あなたの指に百合の花粉を付けてしまった
跨がれるセロリの脚を持った子に
マーチングバンドに彼をさらわれる
おばあさんの鈴追いかけるおじいさん
明日の朝お墓へ持って行くバケツ
ひんやりと腋のあたりにある銀河
蜩の卵を蜩は愛おしく思い

パイにして食べてしまいたいくらい好き
象の涙は皺を伝っていくんだね
落ちやすい場所に飾っていくんだね
亡き人と見まごう冬の防砂林
果汁まだ滴る四十代の皿
惨敗や白く濁った貝の汁
仏壇を置くので和筆筒をどける
竹の葉を浮かべたまま凍る水
たくあんを小さく切ってあげようか
泣いている首の後ろに日が当たる

大津市 峯 裕見子

死は時に近くにあるって青磁色
痛いのはここかここかと春になる
届かない桃を見上げて首を
まだひとりお化け屋敷を出てこない
どうしよう私の悪がきらきらし
猫の仇討ち金目銀目を従えて
負けを知るとんどん通る鼓笛隊
そうさなあ手向けてもらうならあざみ
優しすぎることは罪悪天高し
みの虫が揺れる誰ともぶつからず

愛知県 渡辺和尾

いちにちは風に吹かれて春の試歩
夢見がちな人へさくらは蕾かな
振り向いてまた花なりし空なりし
さくら舞うわが壮年の日がそこに
草も葉も緑 しばらく汗流す
緑濃きところで指を翳しおり
雨粒を見ている 少しでも未来
春昼や遠方の音聞こえる
小雨降る午後は眠い目で過ごす
蕾から蕾へひと日渡りゆく

あくる日は忽然として夏の日
夢叶える 夏空のいま広がりぬ
少し歩いて空を見上げるこの暑さ
美しいものよ夏にはこんな雨
わずかずつ夏も動いて朝の蟬
はぐれものの鳩かもしれない庭に一羽
海へ向く思考をきょうも練っている
ゆうぐれの かたちあるものくれないに
もろ手を空に差し出しぬ 夏一挙に
夏と秋混じる季なりし迷うところ

体中秋晴れという疼きかな
世の中を泳げば古い古い塵
風を見ようと丘の上まで来たけれど
すでに秋 窓硝子から見えるもの
にんげんに傘 やわらかい雨続き
いよいよの秋に入りたるまなざしよ
お陽さまの大きさを知らず傾斜角
ゆっくりと走れば雲が従いてくる
芽を出した懐かしいもの柔らかないもの
冬の風音 むかし傷つきいまも傷つき

大東市 柿木英一

オキシフルで傷を洗えば夏の船
裏門を抜けいちじくの木に倒る
声を殺せば寒の卵はひとり立つ
夢はこの先雨乞いの輪に残る
近く秋の解体船を見届けに
眼帯のうしろで帆船が傾ぐ
オカリナ遠く石の原ゆく乳母ぐるま
地下街の飾り窓なら恩知らず
シンメトリックな風景に疲れる宮廷
九月風の日無心に描く菊科植物

処方箋水増し犬の頭を撫でる
神さまの迷路で頑固な嘔吐
銀行で裏返す絵のない絵本
最晩年の真昼涎を垂らす神
薬局の小窓をひらく四捨五入
夢殿をたずねて歩く無精卵
手掴みのりんごと渚まで走る
夕焼けの縄跳び妹の純度
菜の花の黄の喝采が届く耳
リフレインが好きな場所塞ぎの石

青森県 戎 修

次の風ばかりを待って帆が朽ちる
陽が沈む蟻の背中を斜して
耐えるのに慣らされてゆく雪の曲線
五感から先をアスファルトが埋める
かつてミミズの編模様
祭り笛独楽はことりと横たわる
バーコード雨降る夜の蜘蛛の糸
ジェット機の下の日和の茶摘み唄
鱗キラキラ枕を持ってぬ人の群れ
凱旋門隊列を組む二枚貝

登録番号翔べぬ蛭を背負わされる
自画像に鏡の知らぬ色を足す
アメ玉の芯に固まる仲良しめ
汐が引く御幣の白が褪せてゆく
永遠はいくつで割れるあみだくじ
終列車夢を跨いだ靴の紐
錆びついたガードレールの向こう側
闇は袋一人一人に蟻の顎
雷鳴を足下に置いて胃の手術
たとえば指は常夜燈

飛び魚の前へ前へと行く別れ
雪の戦慄耳を使えぬ雪うさぎ
地吹雪を浴びる乳歯を捨てた朝
くらげゆらゆら神楽は遠い母の里
かつこうのどこまで齧るだらう
ハモニカすかに父を想う舌
春を産むくちゅうとうぐいす餅の餡
蟻の巣の卵のように子を寝かす
シュボンシュボン立ち上がってはみたが泡
初恋や太郎はふっと in g

封筒の間に咬まれたことがある
改札抜けて期限の切れてゆく男
散るのではなく花は爆発するので
十字路が父の眉間に浮き上がる
何枚も診察券をもつ仏
家族と鍋とシンポジウムが待っている
葉桜にかわる許しを乞うように
目覚し時計に血痕がついている
点滴の落ち方ばかり辞書でひく
秋桜の群れから帰らない妻よ

夕の坂亡父よりはやく母見つむ
まこと父の子水こほれども嘆うのみ
噫 父の 水竹筒は藪の中
亡父と呑まん平家ほたるの幾万火
父を連れて螢の里を出てゆく亡姉
姉よ手を打ては生まれる雪の蝶
ついに姉魚の衣を盗り帰えらざる
母の膝にさくらを渡す別れかな
母を捨てた村あればこそわが墓標
生きかな水杓かりをかき分けて

白く白くさよなら告げて道を折る
向こう岸母いつまでも立ち尽くす
後方に見える……蹲る青年
影絵遊び我が指先の人だから
この辺がひとりて涙拭いた場所
背を見せて去る人のあり寒椿
白い杖投げ捨てた日の幾度ぞ
遠花火一家団欒して孤独
ありがとう素直に言えて秋深まる
耳だけが獣の形 雪の杖

さくら湯のひとひらごとの物語
甦るはるかはるかに螢飛ぶ
赤い鈴呼びつづけるのは誰だろう
遠い日の君が見えます レモンの輪
夕やけと語る明日の匂うまで
あれ以来眠らせておく片道切符
甦る記憶一枚レモンの黄
鮮血が少し流れただけのこと
風立ちぬ 幸せですか午後の椅子
病む父の冬のいなすま聴いている

浴室で父が漂流する時間
一冊の本を奥歯で噛んでいる
海が割れると古本屋があった
人肌の名刺をいつも持っている
ネクタイを締めた深海魚でござる
枯渇した泉が下駄箱の奥に
ボトルの底の鮮度の古い男たち
祈りからさめると生ぬるい両手
爪を切り終わる手紙を書き終わる
積もる雪たとえば父の夜の部屋

胎動や青桐の児と定めたる
花吹雪背き合うのは猫夫婦
花岸にぞろぞろ影の耳語ける
風はむかしへ赤い吹雪の絵の中へ
病む天ありどうせ戻れぬ灯蛾連れて
落蟬の口開いたまま十時の天
屍の蟬しらじら仰ぐ炎天地獄
夕顔や蟬一對を抱かんと
セロリ噛むわが心脈の大運河
鈍痛の一涯ありや夕霧忌

遠回りしてきた道で夕焼ける
眼底の少年母の手に曳かれ
なぜだなぜだと指先で観る桜
馬喰の馬引く影と交り合う
月皓皓木も草も動かぬ時間
蜘蛛が死ぬ足のすべてを神に触れ
指切りも涙も石になる形
音絶えてああ切り株に月が降る
姉の手を借りて拾った水の骨
鮮やかな西日にのめり込んでゆく

蟬が鳴くいのちの重くなる手紙
割れそうな壺から音が寄ってくる
眠らない街で失う鳩時計
花束の真ん中に居てひとりぼち
皿二枚この寂しさって何だろう
これ以上何を信じてサンマ焼く
あたためて少し他人のスープ皿
目覚しが鳴る なんとなく生かされて
行くはずだった青空が消えてゆく
冬鏡 枯れゆく影の置きどころ

四日市市 樋口 仁

深夜映画を見ている影が瘦せている
絶望に首輪をつけてしまったが
異次元に迷い込むなら春の暮
風媒花耳を塞げばすむ話
親指のうしろで休ませてあげる
雲の形を記憶しておく観覧車
父を放そう深呼吸の中へ
濡れようか受話器を伝い来る霧に
湧水を見つけてくれる配偶者
飛び乗ったのは涙腺を走る汽車

高松市 みとせ りつ子

わが影のあやとる糸を解いてより
花雪芳しければ死者も笑えり
怨怒と炎ゆる木霊よ誰が屍
街はしくれわが片影のやたらと哭く
喉寒しひと目ひと夜の砂を吐く
鳩尾にああ冬が重なりぬ
けられとわたしを犯す冬原野
みな去って邪鬼と芒を枕辺に
歳月やぐずれる拳その行方
夢の夢芒野越える羅漢たち

青森市 福井 陽雪

満ち潮の先に私の咳の音
網の目を這いつつ春の音を追う
我が影のほかに影なし炎天下
転げ落ちた闇から戻る螺旋階段
勝ち負けに無縁な花に水を差す
枯紫陽花に溶けてゆくのか少年少女
馬の瞳の中に一輪月見草
真っ直ぐに歩くと光りだす闇夜
風開くハンセン病の笑い顔
一、二の三で光への戸を叩こうよ

福島市 西海枝 みちこ

締めくくするようにわたしの手を洗う
喪が明けて指の想いのひとつずつ
旅立ちの母の膝から冬の虹
見極める冬の向こうにあるものを
春になったら丸い背から昇華する
どの窓も太陽が好き布団干す
理由もなく小さな春を見ていたい
響き合う辺りにいつも居てくれる
迂回して夕陽を見てる地藏眉
虹のはじまり 魂は浄化して

落ちていたコトバを焚くと霧になり
秋の落書ピンクハウスのフリルたち
小春日の方舟に播く鳥の種子
地吹雪やうしろ来る人皆優し
深雪の先を行くのは憎まれる
文庫本溜る根雪の村に住む
玄冬のを漂うピカソの抱擁
恋文も風花も降る春の辻
春は憂し鳥の玩具が発芽する
露地裏の一軒消えて風が死ぬ

硝子壺まだ弟は泣いている
全身をくっつけ合っている遊び
少年もトランペットも苛立つ青
青柿はころころ落ちる淘汰かな
ひりひりと喉が渴いて群れを出る
ゆっくりと壁が逆立ちしてくれる
テーブルの林檎一個が全世界
息を吐くたちまち深い沼になる
定型を破って青い薔薇ひらく
秋の扉がひらいて自転車が転ぶ

そして螢は雪の温もり知りました
木守柿約束ひとつ触れずおく
いとしきものを縛るに脆き紙こより
ほんとうの訣の後の蒼い空
冬の雨 今抱きしめて欲しいなり
観世経り君偲ぶとき立ち上がる
モノの絵に花が漂よう君が漂よう
過去形にすると結び目やわらかし
ころ騙して涙が凍りつかぬよう
切なさも透明になり桐の花

ゆき ゆき ゆき俗名の父に 雪
担当医のうしろで割れている鏡
生前院号の文字にこだわる古い小町
やがて扉は独りになって泣くだろう
彼岸落日わが俗名も色褪せて
白檀の香りを食べている時間
蔵開き棚からおろす遠い海
語り部のこころの底に点る亡父
瓔珞のなかに父降る伽藍堂
一族のこころ強さも昼の墓

再生紙雑木林の素描など
百年咲いて一日泣いた紙の花
水鳥を見送りわたしも荷をつくる
草はまだ眠りこけてる辞令の番地
箱舟のゆくえ四月の紙の街
葱植えて背骨を正す母である
水番の視野かがやけり婚約す
豆腐屋の朝と縁を深くする
たっぶりの真水を抜けて嫁入りす
朝焼けの湖と向き合うジャムの瓶

満月へ男の首を投げ上げる
干潟の海もポストも月とよく遊ぶ
橙熟れる見たことのない祖母の顔
菩提樹の下を往き交う死者生者
そしていまも飯を欲しがらる仏たち
死んだ父の高さに咲いている桜
私の港になった父の骨
檀山に雪降る仏等の眠り
死から生へ一億光年の眠り
春の雨やがて弔い唄になる

春の抽斗すこし高い音で開く
眉淡く描いて今日は逆らわぬ
失ったものは還らぬ姫鏡
死はそこに足裏の砂やわらかし
隠しごと蜜柑の皮の厚きこと
絵の中に翔ぶ鳥がいて鳥になりたし
かすみ草きつい言葉をやわらせる
どのキーを押せばあなたの微笑にあう
畏かも知れぬ窓が大きく開いている
少し不安で急いで曲がる曲り角

遠景にさくら言葉の旅をする
迷うては胸の樹海を蝶が発つ
たましいの鈍痛ありし雨後の空
鳴らぬピアノが佇んでいる運河
水の輪はきのう生まれし焚火あと
トンネルの長さも過去になる景色
しあわせな紙人形は世にうとき
酔えば絵になる写楽もわたくしも
通りすがりの猫が押してる横車
手負い乳房の山姥なれば雪やまず

苦小牧市 伊藤 紀子

八月の鳩踞る霧の下
時計屋のガラスに沈む無数の指紋
葉月去り手紙が残るふたつみつ
無人市みじんも媚びていない空
一對の碗 うす味の人口論
漂泊の刻印となす月見草
忘恩の花豆ふくら炊きあげる
宿木がわんさと生える静止画像
漬物石ずしりと冬の念書など
過不足のなきよう冬芽庇いぬく

福岡県 松 永 千秋

空白の日記一日黄砂降る
一本の桜を抱いて果てんかな
途方にくれている満開の桜の木
傷口は声を発する真暗がり
私をきれいに洗うグレゴリオ聖歌
冬の雲遠くピアノが鳴っている
夕焼けに攫われそうで杭を打つ
夕焼けの向こうに並ぶ聖歌隊
そしてだれもいない満開の桜
残像となる一本の彼岸花

宮古市 田代 時子

鳥になろうと翔んではみたがシャボン玉
宙吊りの自我の形に曲り茄子
海も生命も軋みに満ちて月登る
訣別や冬の画鋏が掌に残る
ひたむきだった出発点に戻ろうよ
霧の深さに寄り添ってゆく命
花吹雪浴びて去りゆく郵便夫
くちうつしのように夫と春の風邪
憧れは哀しいまでに蒼である
初夏海最後のパズル嵌め終えて

小樽市 斎藤 はる香

ふる里の青い螢と夜を明かし
ごきょうはこべら指の先まで母灯し
母の灯台 多喜二を何度照らしたか
帰省して家族合わせの春の指
子の帰省 竹はまっすぐ伸びている
半熟たまご父のてのひら漂流す
黎明の指にルビふるわがいのち
うやうやしい敬語に回る母の独楽
化粧水ぽとりぽとりと秋ひろがる
乳母車とおい化石の森へ押す

コンパスをくるりと回し森を消す
 モナ・リザのせせら笑いを誰が知る
 掌にのせて今日一日を風葬す
 草酒堂々山門を出てカラオケへ
 謎解きはあきらめました土饅頭
 八十の性とやらん紅の糸
 世界史のどこに隠れたアマテラス
 トイレまで歩く荒寥たる日課
 今なんと死にたいと言った
 教会の赤い屋根から塩胡椒

台風の目玉の中の皿回し
 店を出てあかバカでいいバカでいい
 花の市再婚話ふところに
 熟し柿こくつと呑んだ閉経期
 パンティと頭すれすれ父は来ぬ
 ふるさは冬の季節に冬を喰う
 ベッドタウンに元旦が来てそれっきり
 助平な民話が消えて村が消え
 損のない仕組みがあつて倒産す
 泣いているモグラ叩きのオトウサン

柏崎市 横村華乱
 涙金なのに気オ付ケしろと言ふ
 鈍刀の錆を舐めては酒を酌む
 父親がピサの斜塔に見えて来る
 万歩計ソクラテスには敵わない
 手切れ金アツケラカンとVサイン
 八月や訳の分らぬ日がひとつ
 風の吹く方へ喝采して暮らす
 金太郎飴の先つちよのアカンペー
 晩年を染める土色草の色
 寒山拾得が呟く墨壺の闇で

東京都 菊地 俊太郎

一日がはじまる筒抜けの個室
 先を争うちくはぐな足にほん
 血のいろをたしかめに来る郵便屋
 遊歩路のひとりと凭れ合うフーガ
 足蒸れて聞き取りにくくなる羽音
 突堤に無臭の髪がへばり付く
 反芻の刻盛り土がゆるみ出す
 にこり湯の何処から何処までがほくか
 客室を彩る打楽器のかけら
 手付かずの版木いちまい視野に置く

フィクションを持ち寄る朝の水呑み場
 布を裂く音の辺りへ歩き出す
 手あぶらの濃淡で描く現在地
 訂正印 みんなと溺れてる浅瀬
 いもうとが残っていたキャベツの芯
 ひとりだけの時間たつぷり防火壁
 骨灰のひとしきり降るスクリーン
 陶板の野に棒立ちの魚たち
 天窓に晒すいのちの乱反射
 歳月がついばんでゆく尻の肉

腋の下がやたらと乾く薔薇園
 点滅の部屋点滅のパンの皮
 錯覚を組み立ててゆく木のベッド
 彫像の埋め木くすぶる自虐説
 ありふれたスナップ十字路の猫背
 生きものに係わり過ぎた石の痣
 あとがきを急かされている 昼花火
 窓枠の疵の寡黙を押し通す
 がらんとする森に住みつく偏食者
 明暗を仕切る縦紋がいったん

高槻市 河瀬 芳子

白桃の淫らを美しいと言うか
 ひと恋わば疑心果てなき瑠璃蜥蜴
 哭きやまぬ蝶なり耐えよというか
 薄刃の上で温ためている小さな闇
 息継ぎの下手な椿から落ちた
 身を庇うかたちで眉を引きおえた
 髪を乱してこめかみに咲く曼珠沙華
 われに似て内なる闇や曼珠沙華
 撫で斬りにされて転がる曼珠沙華
 愛憎や婆娑羅の髪の両手に重し

妬心激しく蝶の散らせしこでまりの白
 刑かも知れぬ蝶へ露な照り返し
 追慕果てなししらと食む冷たき母
 桃の皮ずるりともうどこへも行けぬ
 ジェラシーよ桃もさくらも伐り倒せ
 ギニョールのだらりと仄かなる絶望
 燭みな消して始まるわたくしの羽化
 罌粟ゆれてはらりと棒のごとき裸身
 水かきが深くて切手買い急ぐ
 彌生三月あえかに灯す紙椿

仙台市 芳賀 弥市

閏二月の一日長きちちとはは
 寒鴉男の骨は拾うべし
 結氷の兄おとうとに桃の花
 乱世をウフオホホともさくら
 馬乗りの姉には見える落花狼籍
 紅差してつんつん帰る花の宿
 花屋の花だから殉死を考える
 満たされてあの菜畑へ墮ちしこと
 一斉に酒屋の壘が笑い出す
 第二章までの男の結跏趺座

勃起してどつと明る製本屋
 深夜放送イチゴに接吻を迫られて
 八月の山の彼方の後背位
 雷鳴の真下ざりがに身こもれり
 みぞおちのあたりに誰かいる暑さ
 海月のようにきつとお前はやってくる
 そこその高さにすわる夏みかん
 義姉が来て蝶を食べる端麗に
 征服者の胸の厚さの夏燕
 男を食ってりんどうになりました

あとがきの余白の中のかくしこと
 ハンカチを二枚小町に逢えそうて
 枯れ色の海に溶けゆく月日かな
 輝いてみてもヘドロの水平線
 秋風をいくつ重ねて束ね髪
 バツ一は消そう野菊のクリトリス
 冬の楽譜で大根は切られたり
 降るならば雪と思ひし男の忌
 生き生きと古い掟の小引出し
 巻尺の長さの先は虚空なり

市川市 普川素床

白ふくろうが啼きだした鏡の間
万事休すさくらが咲いてしまったよ
鼻唄がもれる深夜の消毒時間
休日の夕陽が散歩していたな
象の足跡茶の間はいつも薄暗い
むかし男の背中をすべる馬の顔
黒猫がまっすぐ歩く無用の大地
福笑いみんな何かを探している
暗い箱が暗いとは限らない
空を呑み空に吞まれる一列の瓶

血止めして角から消えた靴を思う
やさしさをさて縛ってはみたものの
横笛を吹き確かめるぼくらの裂け目
空の穴通った跡が蒙古斑
買い占められていたぼくの誕生日
耳の穴から這い出してきた昼
木を降りる少女時間が赤く降る
袋を背負いどろぼうたちの赤い足
ぼくがとまると美術館があるく
鼻の辺りのきしみに気づく旅靴

和歌山市 後藤理恵

なつかしい巨人に出逢う砂の国
奪い続けて生きるバランスを掴む
侵入者を喰う昨日のパスワード
錆びついた身体に注ぐ熱視線
レブリカの街で明日を飼い馴らす
角砂糖を舐めるからっぽのわたし
水槽に溜まる期限切れの言葉
定型の明日を草っぱらに捨てる
歪んだ視界に浮かぶ幸せの標本
誰からも遠い秋へと失踪す

次の夜は欠ける想いの月満ちる
眠りの中樞で深海魚が喰う
雨を束ねて祈りは海を潮る
雲を奏でる水面下の指揮者
青空の遠さに草の鞭をふる
泣きながら生まれこぼれ続ける銀の砂
再生が続く沙漠に撒いた水
有限のまぼろしとなる月を研ぐ
青い実に息づく幸せな孤独
海までの距離をてのひらで計ろう

全身に蔭からまりて雨季となる
身の内の爆音聞いているサロメ
シャッターを降ろし 異次元に遊ぶ
嗅覚が侵されている白の沙漠
システムに従う眠らない羊
宙吊りの明日に時間割りを交える
回線を蝕む使い捨てのニュース
すり減ったハートにケチャップをかける
寒風に晒したしを中和する
冬の廊下で捜す私の帰り道

夜明けの唄

やはらかに肉切る舌の熱いうち
夫が横にいて太くなる丸太
夕茜の白さをまとい妻であり
肩凝りの妻が優しい石抱いて
遅い夫の腕に雨宿り
子を抱いた絵がある宵のクレマチス
待ち針が足りない夜をいくつ持つ
人愛し真冬の稲に踏まれたし
千年の廚の音よ 人減らし
子が笑うときの匂いをとっておく

大根を洗う一重に昏れてゆく
魔がさした受話器を置いた夕の舟
夕暮れて指の白さを喰いおり
手を濡らすしあわせがある泥の水
掃除機の音させていて無限郷
太陽が沈んだ空を愛すべし
旅の鞆が戻る 大切に仕舞う
鳩時計 三年先は敷のなか
見えぬもの 途切れ途切れに傘を挿す
ためらって口にする過去の日めくり

山梨県 乙黒初音

冬はかなしいかな 夜明けの耳落とす
素顔のわたしに手渡してくれる毬その他
耳揃え夜明けの馬に揺られゆく
くちづけや 生臭きもの持ち合わせ
美しいけどものの耳 宵の難
冬は好んで無頼の君を伐り倒す
蜜柑剥く 日の色をした指で剥く
熱の子に陽を当てるのは冬の山茶花
人間でありたし 愉快なる背伸び
苦もなく蝶になる他人の空

大垣市 斧田千晴

蓬の香いつしか父は斃れけり
また巡る愚かな春よわが肉に
春の雨紛るるものにこの命
雨蕭々春は大地を犯しゆく
頭痛かなてのひら渡る紋黄蝶
古傷の疼き始めの春の雷
邂逅というには重い雨が降る
時として首振ることのいたましき
風激しやましきことをまたひとつ
寒そうな裸がひとつ絵本の中

砂漠を歩く小さな旗を振りながら
空は鈍色かえすがえすも悔いまみれ
放尿の男の背なに止まる蝶
てのひらを重ねて闇がまたひとつ
額の汗野心というも美しき
雨降れば雨風吹けば風となる葦
夕暮れを斬る 笑みでまたはことばで
生温かき受話器に口を近づける
幸せなふりして笛を吹いている
春うらら 命懸けとは良いことは

いつまでも鶴しか折れぬこの十指
春塵や見えぬものの崩れゆく
検尿のコップにまぎれこむ桜
肉塊も骨も喰らうて詩人かな
心臓をむすく摘まれ落ち椿
錆び釘一本ボロリと鈍い朝がある
脱水ができない重い重いパジャマ
私はなんにもいわず鳥を待つ
見送れば君はひたすら影である
目を病んだ鳥の一羽を飼っている

一ページ目に書くあなたとの出会い
難問が一つ私は誰だろう

傷口に優しい嘘がしみてくる

青空がここにもあった水たまり

信じたくない知らせあり風が止む

シーソーがこわい話せぬ過去がある

無事であることが不思議な社会面

覚悟などなくて上ってゆく朝日

見上げれば空は限りのある広さ

美しい人に夫が会釈する

海道市 岡本 恵

いつか来るその日へしりとりは続く
初恋の痛み発酵し続けよ

つまびいた道に四ツ葉のクローバー

落ち込めば友は元氣になってゆく

一匹の蟻が上ってゆく墓石

上澄みの中を上手に泳ぎ切る

待つことになりの命費せり

運命のせいにはしないマイウェイ

新しい出会いよどんな花が咲く

人生は二度ある桑のうすみどり

青森市 斎藤 茂生

レモン噛む欲望の汽車旅だてり

手に拘う水あり冬が始まりぬ

遮断機が上がって僕が消えてゆく

膝をかかえる僕に似ている深海魚

父という名に乘せている冬帽子

銀行にのっぺらぼうの案山子たち

ジグソーの薄片欠けた街に居る

なけなしの金を払って買う鱗

善人と言われ帽子を深くする

原っぱにトム・ソーヤいた風の午後

定刻に電車は去って僕がいる

銀行の受け付けにあるしゃれこうべ

オルゴールの音符になった昭和の譜

春雷やジェームス・ディーンうつむきぬ

鮫鱈の涙が海に溶けてゆく

縄文の地層 素足のヒトになる

裏切りよ喫水線の下にいる

酸性雨絨をふるわすマンドリン

なぞなぞを柩に入れて夏が逝く

終戦忌ガラスの兵が溶けてゆく

父の背の微罪が積もる夏の風

べちゃんこにつぶれたアルミカンになる

夜行列車の窓で瀕死の模に逢う

マネキンが傘さし梅雨の街を往く

バス停に昨日の僕が濡れている

ボケットの底から蝶が湧いてくる

無限残照母と吉祥寺で別れ

鮫鱈が一匹海の眼を吊す

譲れぬ夢月がうつりと逃げてゆく

味噌汁の底にひとつぶ汁がある

伊勢市 東川 和子

赤い実の落ちたあたりか友だちの死

すれちがった季節の中に君がいた

また空を見ている君のいない町で

手紙が来ない秋 自転車走らす

図書館に行くつもり秋をまっすぐに

秋響く二十五年ぶりのビートルズ

後ろからも秋 私の髪にしろきもの

なんだなんだとやってくる更年期

みんな他人 バスは行ってしまった

新聞を広げ私の海があるかしら

くつろいでいるのはあなたの夏帽子

花を摘む間にくいちがった時間

そのうちにジグソーパズルできあがる

少年が眠っている どうぞそのままに

気がつくとき青年になっている首すじ

花届く いま生まれたばかりの未来

くちびるに触れそうな未来 揺れて

夢紡ぐ どこまでも私の好きないろ

人を好きになったらしいポスト前

好きな人を集めておくのこの世では

二十年前に出会っていたらと風の道

夏の夢だらうか 約束をまた交わす

ほろ苦くなるのは俄雨のせい

アプナイのはたった一パーセントのあたし

やっかいな芯があるので困っている

あまやかに降りてくる午後の字幕スーパ

指で輪を作る私の幸せほどに

生きているんだよ シーツがよく乾く

一緒に暮らす人あり 窓を拭く

わたくしの赤い実です冬の街路樹

黒石市 岩崎 雪洲

接点

みんな鬼芒ヶ原のかくれんぼ

夕焼けよ絶好調のブランコか

人原野風の微熱を持ち歩く

寒德利 それを正義と呼ぶのなら

津軽炎上五段活用させて風

ゆれてゆれてゆれて直立する芒

刻眠る い・ろ・はと呼応する破線

天寿全う 墓のとなりのりんこの樹

菊に問う弔い人の明日以降

石積み唄 男がぼとり女がぼとり

カビ臭い一日ぐらいカビになる

逃げ切れぬ月もろとも進化論

南無陀仏 和綴じのまの父がいる

おふくろの海だ晴れたり曇ったり

骨粗しょう軽石だって石である

落下寸前 父の手母の手桃を待つ

風の遺書真白きままの紙風船

50年父は語らず母は飾らず

山眠るあの世この世をいただいて

津軽滴々 辛夷・れんきょう・花りんご

人間の晴れ間 かいわれ合唱団

がんばってがんばって桃の児と泣こう

氏育ち漬け物石に諭される

DNA 生きる作法と死の作法

参道の夕陽に舟を漕ぐふたり

脈拍のゆづつ眠る

交差点曲がりきゅうりの文化論

溪流をなぞってポトリ黄泉のこと

静脈をクツクツクツと雪の磁場

永年勤続手もみ洗いがまだ続く

放浪

暗幕をめりめり裂いて鬼堕胎
綾取りの橋を崩して母を出る
夕焼けに溶けてしまったかくれんぼ
アスピリン時計の針が消えている
虫籠を下げ中年の森を行く
雲はなぜ動くのだろう草枕
肋骨を焼けた視線が抜けてくる
加速する夜の蒼さに爪を研ぐ
あいまいな日本誰かがおならする
鮭遡上秋はどこかで射精する

茶髪茶髪頭の中の酸性雨
秋拾う枯れ草色のマニキュアで
花好きのあなたのそばで花を見る
三月月に鬼火とろりと茶を点てる
密会の時計はきつと狂ってる
片腕を預けた奴が戻らない
縄電車操車場から帰らない
コンドーム向日葵はまだ揺れている
どこまでも鳴り続けている話中音
寅次郎笑いはいいつも悲しいね

青森県 八戸 むさし

青空をかき混ぜているミズスマシ
褐色で叫び続ける土偶の目
暗闇に叫ぶものゝいて干し大根
一人ずつ杭を打たれて月明かり
ゼブラゾーン正義もやがて裁かれる
せせらぎで洗い続ける惹一ツ
夕焼けの中をいつものボチが来る
真っすぐに僕を見るから日が昇る
しがらみを抜け望郷の鐘を打つ
そして今鈍色の野を駆ける馬

名古屋 吉田 三千子

麦秋のうねり連夜の雨あらし
髪にばらばら吐息零れて二百日
真水いざ止めん さらばの景色
裾を攫って白雨の闇は近づきぬ
わたし夕影哀しい色の綾取りよ
夏の日の素足を戻す夢祭り
花と觸體と 急なる天の落し穴
一生を疑いぬ いちめんの月見草
咲いている白は覚悟を決めている
雷雲や廢船静かにやって来る

人を問うべき海は風になりゆきぬ
猫の目の気怠い時間 りぼん外す
必ずと言った 火照りの骨さ
不意に桜の刺青の腕欲しくなる
白い花 この正夢をいかにせむ
如月の絵本はすでに雪模様
早春の水菜の青を強く抱く
苦い春だと言おうよ サクラサクラ
光る椿に病名は言わずにおきぬ
天上天下 光を纏うものすべて

お日さまの下で余熱を解きあう
枯草に交差の続く光たち
歩道は真昼 鼻の高さを比べ合う
クチビルニスブリン塵トナルワタシ
音楽と砂糖を混ぜるだけの街
薔薇くらりくらりと脈まで刺す
突然の不埒 詩を喋る裸心
タオルケットに臥せてしまえば観世音
青の部屋にはからっぽの耳がある
静かな雨に濡れてなお生きる

札幌市 加藤 かずこ

一族の森もクローバも痩せてゆく
カルシウム欠乏いびつな林檎
ぼろぼろの糺迷うてる交差点
プチトマト熟れる重すぎる紙の皿
欺瞞の図鑑を逃亡する仔ねこ
ギザギザのレモン少年持て余す
ひと粒の葡萄を裁く学園広場
死にたがる羊を揺するユダの笛
夏の終りへ迷子のスズメ封印す
ポップコーン弾け戻らぬ一輪車

ガラスの階段転がる尾椎骨
巨大劇場にあふれる溺死体
ゲーム盤の上にあるパンとサーカス
くたびれた肋へ灯す絵蠟燭
抽斗から溢れる蜥蜴の漫画
針のない時計を探すキリギリス
踵からゆっくり水が責めて来る
善人の仮面落ちてる動物園
傷口をふさぐ一椀の粥
鈍色の靴が重いか道化師よ

風いちまい抜け烏賊裂く白い指
身のうちの蛇を殺して飯を炊く
白桃を食べた二人の共犯者
手鏡翳る行方不明の花火師よ
落し蓋から漏れる亡母の余罪
斬り捨てたカモメ乳房へ漂流す
鍵穴をするりと出て行く赤い舌
ピアノ狂い出す水河期が来る
ふくらはぎへ隠す一匹ぼたる
ながい喜劇が終った 顔を洗わねば

花巻市 あべ 和香

めかくしをとれば満開ももさくら
パレットにお酒をすこし春の宵
咲いて散るこの真実が許せない
マネキンに心覗かれ街は春
たんぽぽがふわり翔んだよ母の手で
虹までの距離を測るか竹とんぼ
花山葵ひとりの清さなど想う
親指小指明るい話へ向いてゆく
明と暗きんどうの葉をうら返す
水ぬるむ花もわたしも咲く準備

優柔不断そのやさしさに騙される
手帳からひとりを消して雨期が去る
標的が見えずに乾く水鉄砲
おきざりのレモンよ萎えてゆく夢よ
すすきすすきゴンドラの唄にゆれて
雪の舞い一日見ているひとときらい
アンテナを畳み寒波をやり過ぐす
葉っぱごと食べる食べないさくら餅
弾けねば熱の去らない鳳仙花
生きたくて絡む鳶の葉切りおとす

襖あけむらさきいろの風になる
和服着るあなたのための花になる
ブロンズの腰の細さに降るみぞれ
薄化粧しましう雪に負けぬよう
ティポットいつでもきみを待つかたち
散骨のように雪舞う村の葬
蝉しぐれ語り尽くせぬことばかり
肩上げを下ろすレモンの手が伸びる
風紋のかなたなたに予約席
手探ぐれば草の根柢り深くなる

遠い父寒いところに咲く椿
生き死にの立ち話してぼたん雪
父帰る少し泣きます ふきのとう
情に溺れて溺すすりあう住み処
路の藁ひもじくなつていく未来
風を追い追いつめてゆく雪柳
新緑を抜ければ待っている木橋
啖呵切るそのまゝ弛むひもである
空は晴れているのにふえる水たまり
父の背に月が降りくる即興曲

風の音

みじん切り妻が走っている時間
牛言葉放てば春の野が動く
花吹雪どこまで人を救せたか
走る子に必死に離れまいとする
イントロが長くて森を抜け出せぬ
タウンページの海に男を売りに出す
ピアスからポトポト落ちる哀がある
雑字が邪魔して未だはばたかぬ
私の心を脱ぎに行く散歩
魂が肉屋の鉤に吊される

哀しみの深かければ空その果ての空
通り雨だろう そうして生きてきた
もう一人の私を殺す天の川
よるべなき心で魚のぬめりとる
まえば海あるばかりなり常夜灯
今だつて姉は素足を見せている
親指のしびれを月に告白しても
星が光った ははが言いたかったこと
胃が焼ける零余子は父のかたちして
満月は明日通夜の客となる

岡山県 福力 明良

大根の白ふるさとが病んでいる
切り株に男と女の秋がある
雪の白私事がが洩れやすし
追憶の轍は白くなるばかり
手鏡の深いところで鬼を飼う
モナリザの微笑が醜酔したらしい
山少し動いて秋が昏れて行く
喪の森は一層緑ふかくする
海怒涛いま寝返りの機は熟す
肌寒い完結編がある河口

福岡県 長井 すみ子

もっと深いところで揺れている絆
遍歴をかくす等身大の蓋
鶴を折るちははを折る 無策の手
萍の青と流れるほとけたち
カボス絞って五感の秋をたのしまむ
咳きの中に逃げ込む冬蜜
テレホンカードの穴から覗く無為の街
葬儀屋が来ていちまいの絵に変える
人間を脱ぐ一刻の草いきれ
舞い終えて鶴は民話の石になる

北海道 野村 禎子

はんかちにあいろんかけて六十歳
還暦や残り少ない砂を吐く
目薬のつめたさ独りというつらさ
生きている証しに膝の痛みある
旗振りの旗汚れてる昼の月
ふるさとへ帰ろう岬の風がいう
砕氷船が行くバファリン効いてくる
悪妻から足を洗ってつまらない
とろろ蕎麦病む膝底う事に馴れ
ししゃも焼きました賭けに負けました

竹の節光る夫婦の歳時記で
札束も聖書も掴む手を洗う
図書館の片隅に湧く青い時間
手枕の中を流れる会い 別れ
羅生門この世の側に降るさくら
更に闇あおい蜚を追いつめて
音だけの火花を信じ過ぎないか
蛇に生れて草も大地もわが味方
ある別離冬の障子を開け放つ
灯を消すとわたくしだけの的になる

寒がりの私と生きてくれますか 夢
くしゃみする誰かが噂してくれる
切れ味の悪いナイフと生きている
ひとつずつ拾って捨てる手がありぬ
裏切りをさとられぬよう灰汁すくう
わんさと宿題がある裏の林に
海へ雪降る占いのバカ
雨から雪やっぱりまずい言い訳だ
疾しさが言えぬ字が曲がる
最後まで呼吸が合わぬ冬だった

無添加でのごそ童話の柿の種
頬杖はいつかの癖とおり雨
薬を掴む薬の脆さは知っている
音たててうどんを吸るいのちとは
肩張って何を守って来た月日
納得のかたちに蟬螂の骸
終焉を舞う羽衣を縫っている
訴状一枚ながれ蜚に託そうか
冬の竹垣母を待たせまま昏れる
忌は巡り埴輪の馬の首うごく

死にたいと今日も嘘言うしくらめん
ななかまどが朱くなる仕返しだろ
笑ってる写真ばかりを引き伸ばす
生き下手な女を包む包装紙
時々知ったかぶりする川である
塩胡椒きかせた返事待ってます
おなじ皿並べて積んでいくさかな
残されたパンの耳から話聞く
敗北のかたちに魚焼きあがる
もう後がないから踊ってみましょうか

冷凍庫のパンは長丁場の戦
相討ちの始まるカーテンの日焼け
手付かずの塩の産まれる棚卸し
嘔吐する時計も積年の備品
口中の粘り不遜な樹を植える
電話番する生業のテリトリ
病人にふんだんにある泣く時間
潮の目を読む身の程は身の程に
憐憫を撥ねる石ころ道の石
カルデラの風ぎに懸案書をわたす

善人があふれる春の神経科
ときどきは倒れてみたくなる土堀
躁から静へ一瞬の花火
セルシンを打った小鳥をあたためる
無神論 しずかに爪を切っている
黙認のかたちひとひのさくらさくら
目のうろこコトリ落して辛夷咲く
針葉樹林からときどき洩れる哄笑
血縁の森を抜けると晴れてくる
解放区の夕焼雲が美しい

ほとけごろの骨にからむは但し書き
ダイジェスト版古着屋のスターたち
亡霊がかちやかちや鳴らす飯茶碗
少女期の庫裡に貸本屋をひらく
前屈の冬に馴染めば主婦湿疹
身ひとつの重さ薄水しらしらと
水垢を掬うて水のほとけさま
擦れちがう写楽いつまでの景色
刷り込みの目鼻と歳月をわたる
残命の綿囀むアバウトな甲羅

しゅんとして泳ぐ真冬の金魚鉢
自叙伝と昏れる白い時間帯
わたくしの守備位置に置くセントポーリア
しがらみが肩に食い込む女の季
ホッチキスで止めたきものの二つ三つ
人裁く言葉へすこし距離を置く
折り疲れて身の丈ほどの波被る
シャガールの馬といちにち対話など
父の視野からゆっくり消えた竹とんぼ
炎え尽きてヒトの匂いをみんな消す

札幌市 高橋 蘭

隠遁の屋根葉さくらの彩がます
存分に穴掘る茶飯事の死角
シニアグラス拭けばしぐれる情報誌
零れ秋こぼして刻は順当に
青菜食む染色体は夕まみれ
守備範囲ぞろりと横たわる樞野
猫の目を縫うて枯野のナルシスト
霞刷く姥捨山の既往症
死生観朝な夕なをしずくして
煮含める大根遺書はたなびいて

仙台市 宮本 めぐみ

この辺が潮時らしい鐘の音
黙禱の長さで卵茹でている
オムニバス映画と昏れる烏瓜
戦もう語らぬ夜の洗面器
剥落の愛を逃れてみかん剥く
螢の里へ置いて来たのは相聞歌
備忘録捲っているのは菽忙
自己主張したがる冬の独楽回し
どの面も孤独の影を曳いている
枯れ野行く のど飴ひとつポケットに

和歌山市 野々圭子

受胎告知 岬の小さな家だった
ふたりで摘んだブルーベリーの煮つまる日
雨の日に逢いたくなくなった黄色い薔薇
シャガールの青の吐息に招かれる
午後の壁の自画像に嘘みえてくる
鳩消えて青い絵皿をあたためる
欲しいのはたつたひとつの風車
さくらんぼにやさしい言葉かけられる
失意消えあなたは野火の話する
夢と嘘わたしに見えたふたつの虹

新潟市 渋谷 美和子

羊水のことには触れぬ母の遺書
虚と実のはさまで森に裁かれる
しつけ糸亡母の温さが残る紅絹
錠剤をふやして雨季のまだつづく
スピーチの一文奪う秋の雨
崩されて積木は誰も裏切らぬ
歳時記の節目に浮かぶ亡母の顔
九条の余白へ埋めておくコント
ちちろ慟哭核廃絶はまだ遠く
完璧なアリバイ探すかたつむり

路面電車去る一面の月見草
八月の白い楽譜に在る神話
目の後ろ繰り返されるゲルニカの夢
默契の海よりとどく父の声
カノン響き病める大河の百の声
骨をつつむやさしい布を縫っている
醒めてなお林檎ひとつをにぎっている
寂しくて銀河にのった白い鳩
ゴッホの耳ひとつ包んだ私のハンカチ
ゆきつもるやくそく消えて雪つもる

拿捕船の呪文が溜まる冬の海
雑草の位置から少しずつ背く
春落葉焚く正面にある踏絵
断念の涙を知っている瓦礫
飢餓の子も同じ地球で見る夕日
桃源に亡母の小袖を干したまま
極限をのぼりつつける豆の蔓
不器用な愛ひとつ抱く河童の忌
究極のコント九谷の皿に盛り
五線紙に再起の音符踊らせる

毒舌を吐く不揃いの茹卵
水子哭く女の痛み裂くばかり
如月の禱り哀しや絵馬の数
椿ぼとり歴史の闇を転がりぬ
それぞれの絆に絡んでいるいくさ
右脳にすこし律儀な句読点
薄墨の余白に弾む亡母の毬
臍の緒と民話どこまでさかのぼる
試行錯誤薬いっぱいが動きたす
默契ややがて夕日にルビを打つ

笑う風泣いている風春の風
早春譜聞く渋滞のカララジオ
氏神にいじめ無き世をます祈り
出番までじっと飲んでる隠し芸
思秋期の魔女バーゲンに紛れ込む
臆病な時計狂わぬ時刻む
苦かった昔の味も混じる酒
ワープロの同音異義語に叩かれる
万緑の光燦々霊柩車
未知の語を追って漂う辞書の海

切り刻む残像一つ遺書一通
太陽を置いてそれから描く童画
花かおるおのおのもの風の中
オーケストラ指揮者を待っている沈黙
イエローカード胸に溜っていく日暮れ
モノクロの世界にのびていくつらら
びゅうびゅうと石笛が鳴るいい予感
よいにおいする人間のそばにいる
吊り橋を揺らしつつけている自虐
充電の途中ときどき目をあける

新鮮な魚野菜と美酒少し
散歩にも理屈をつける文化人
カラーにはないモノクロのリアリズム
失ってみれば青春絵空事
真理とは何か問われてる日本
物書けは隠れた自分見えてくる
逝く夏へ澤地久枝の戦史聞く
同じ時刻む時計のステータス
覗くのが怖い心の透明度
掴まえた蜚は歩く虫になり

水を飲む水のことばが聞きたくて
生かされてこの夕焼けに会えました
菜の花の海で風の子生みました
満月や母の旅籠はどのあたり
少年の吹くびーどろの小宇宙
炎天のひまわり男かもしれない
魚の首はねて女のたちくらみ
手帳の中に男ひとりを棲まわせる
水点で逢う男の時計女の時計
水を汲む神が扉をひらくまで

東京都島田小吉

慰みに神の造りし熱帯魚
秋夜長読みさしの本積み上げる
オフレコの糸で舌の根括られる
九条のありがたき知る半世紀
美しく痩せる秘訣が競い合い
昭和史を読む自分史の影を読む
乗り換えの利かぬ余生の指定席
平和ボケなるには早い半世紀
とりあえず出て来た猫の器量褒め
駅弁を土産に妻の旅終る

網走市岩間トキ

靴を選ぶ冬のバズルの入り口で
いつの日か脱ぎ捨てていく縫いぐるみ
裸木抱く風のことばが聞きたくて
源流を辿り一つの樹に出会う
泣かなくなった樹をかぞえている黄昏
堕ちてゆくわたし断崖から見てる
抜け殻の数だけ神に近くなる
生者死者境界線に花を置く
つまびく手待つ流水の巨大琴
神の吹く笛が聞こえて立ち上がる

死もまた旅

絵はいまも黄昏色で地下足袋で
もう鳴らぬ笛だが妙に捨てられぬ
掛け違う釦に深い森がある
無精卵透かすと俺の顔がある
ハイネの詩はるか軍手を脱ぐ茜
蔵入りになるだろボクの私小説
ときどきは叫んで自分確かめて
一行の履歴で過疎の石になる
突き当る壁から透ける父の笛
玉手箱に触れるとりんごの歌が鳴る

生者必滅母の愛だけ掌に残る
源流に母の乳房がボチャとある
山背吹く母に錠剤またふえる
母を焼く味噌汁の香が匂い出す
生まれかわりは鳥におなりよ母を焼く
走り梅雨喪章のピンが指を刺す
洗面器いつから笑顔忘れたか
向う岸ばかりに光っている蜚
逃げ道の一つは父の樹にのぼる
図書館を出る新しい空へ出る

郡山市玉木柳子

少年の一途な風は透きとおる
花一匂どの子もいくさにはやれぬ
人という字の裏側で泥を吐く
アンテナを研ぎに床屋に出かけよか
誰のためでもなくてふらりと花を買う
風も私ももう戻れない駅がある
風船になろうか妻よ青空だ
散骨は妻よ真赤な海がいい
地に還るさくらよ愛は満たせたか
やがてくる死もまた旅よ風の盆

砂川市大橋政良

キリンの首で旗を振るのが夢でした
題のない絵から流れる川がある
マンネリの白い時間が止らない
引き裂いたページにのこる風の音
大根を切る庖丁を研ぎに出す
哺乳瓶ののちの笑い声がする
木偶の目の中にも雪が降っている
ポケットの芥が乾いた咳をする
火が消える消えるとせがむ風おんな
途中下車人間少し休みたい

父の風無職の今も走り癖
パンになる男とパンにする女
砂の上歩きつつける一行詩
カミソリが止るごくりと唾をのむ
止り木で啼いてる冬のキリギリス
秋の絵の中に宿なし犬がいる
紙おむつ地獄の出口かもしれない
することがまだあったろう骨拾う
猿蟹の頃からこんな柿の種
刃こぼれを静かにうつす水たまり

盗難届 おかめの面は無事でした
方向音痴わたしの喜劇かもしれない
空缶をころがすような嘘をつく
目を入れてしまおうとダルマ忘れられ
天気晴朗笑い話を買いにゆく
青リンゴいつも鱗が濡れている
病室の幻想赤い鶴を折る
乾上がって死んだ振りする川がある
ひょっとしてネクタイピンは刺客かな
尻尾だけ隠す大人のかくれんぼ

山が動いて眩しい白が降りてくる
水の輪がひとつ生れてくる眉間
塔の真下で遙かな音を聴いている
水煙の指さす果ての祭りかな
沖の灯を点す一会の鼓打つ
水音高しいま真実に触れている
灯台へ行きつく通し矢を放つ
折り敷きの礼へうかうか火を焚かむ
月光へさりと花芯ふり落す
月の出や翅いちまいを光らせる

岬いまきろいてあり愛は確か
雑木林のわたしの翳は火をこぼむ
赤い実を食べる童話のある限り
譲葉を散らす死んではなりませぬ
火炎土器そなたに返す鈴がある
櫛を流せば椿の落ちる音がする
傘が重くて舟溜りまで来てしまう
道標が翳って藍がにじみ出す
竹に花この世に掟などありて
罪を焼く煙が花かげに籠る

和歌山市 辻 スミ

残響や野菊の墓に還りつく
萩叢の底に溢れる川がある
夏草に夢を見しあと畳むなり
惑いつづけて遠い祭りの鉛細工
生きさまの等高線に散るさくら
結び目を解いて木霊を聴いている
瑠璃蝶のいのち峠は遥かなり
乾いた瞳に灯りを点す小さな賭け
いつでも死ねる草の実がこんなに赤い
人語滲れてわが生いたちを辿るなり

選を終えて

Z賞応募作品三十句の自選は、厳しい自己
観照であり、「私とは何か」という自問であ
ったと思う。川柳は最も短い詩型である。

詩人とは誰にもまして孤独な者、詩人の宿
命とも思う孤独との戦いは尽きない。応募作
品は各々が独自の存在を主張し続け、それ等
の作品との出遇には、最も生命的な声を聞く
一瞬であった。神の心とでも、宇宙の秩序と
でもいうべき個々の現象のなかに、批評精神
と抒情精神を持ち合わせた作家を評価した。

特選 前原 勝郎

再びの病で二度目の手術をした。この一連
の作品の底に流れるものは執拗な自己への問
いの視線と、慰藉である。触れれば崩れそう
な統一感をもって書かれた作品には、か細い
生命力が息づき、孤高がゆえに、作句過程で
おそらく大音響を発したであらうと思われる。

抱ききれぬ歳月深し死より深し
病窓満月生きるといふ戦いは

西条 真紀

秀逸 金山 英子

此度の英子作品は、阪神大震災の体験を
発酵させ、詩として昇華させた。その行為は
「作品を書くことが生となった」といえよ
う。作品を書く上で自愛と自虐のはざまで揺
れ、思いを砕き作品の限界に挑む中、生の辛
酸が見え利那的な日々が見える。これらは痛
切な生命の歎き、情念の振幅の激しい女の、
いのちをうち出した自己愛措である。

生獄の花と永眠らば水ぬるむ
目に耳にただただ閉する十月のさくら

秀逸 樋口 由紀子

由紀子作品に何かが見える。自己の切実な
思いを、作者の言葉で把ねる作業が、適確に
おこなわれ始めたのだろう。生きることへの
真正直さ、限らない不安感、作品に漂う清潔
感、快よいバランス感覚、つまり調和が由紀
子作品の一つの要素だと思ふ。

霧ふかく身体の中に異郷あり

秀逸 柴崎 昭雄

昭雄作品の生命の波動は、若いときだけに
許された、純粹な感性、作品の下敷になった
であらう家族愛は、読む者の心の汚れを洗い
落してくれる。若さゆえの危うさがなく、自
己の生への愛しみを貫き、人間存在の確かさ
を見せてくれた。

青き魚のうろこ刺がしてつきぬもの

選外ではあったが最後まで私の掌中にあつ
た作品を列記し、一期一会に感謝します。

はたん雪請われて誰の傘に入る 州 花

青柿はころころ落ちる淘汰かな 千 秋

カボス絞って五感の秋をたのしまむ

満月を湯舟に浮かべ遊ぶなり すみ子

影絵遊び我が指先の人だから ちえみ

朝焼けの湖と向き合うジャムの瓶 陽 雪

額の汗野心というも美しき 千 晴

作品の燃焼度・結晶度 そして問題意識

吉田 健 治

今回は選句しながら頻りに作品の燃焼度・結晶度ということに思いを馳せていた。そして作者の問題意識ということも。

投句以前の問題ではあるが明らかに誤字と思われる作品が何人か目についた。これは注意して欲しい。必ず辞書に当たって下さい。

特選 金山 英子

今回は昨年の阪神大震災に取材した作品が何点か見られた。金山さんも被災された一人であるらしいが、表層的な面に捉われず、深く内面に鑑を下ろして作品化したので、非常に燃焼度（魂の）が高く且つ結晶度の高い作品が誕生した。金山さん自身、内面に向う傾向の強い作家ではあるが、天災を（核）として、真珠のように作品を結晶させた。この作家魂は賞讃に値する。これからも頑張ってください。ただ取は結句の「あゝきれい」は全体の緊張感を壊してしまつて残念に思った。
・ほろ酔うて亡父の後ゆく七曜や

・水縄や母のとしつきよりこぼれ

秀逸① 広瀬 ちえみ

広瀬さんを選に推すかどうかで大変迷ったが秀逸とした。金山さんとは対蹠的位置にある。金山さんの陰、文語体、情念、とすれば広瀬さんは陽、口語体、知的、と言えるかも知れない。広瀬作品は風通しがいい、明るい、純度が高く発想が新鮮である。何気ない日常から（詩）を取り出す魔術師でもある。上質のユーモアが漂っている。
・門ごとに刃物が立っておじぎせり
・ジャムを煮て河馬の奥さんしています
・パイ焼けば雨の匂いの人が来る

秀逸② 野沢 省悟

常に問題意識を持ち、句に文章に真摯に邁進し続ける姿勢は後輩の鑑である。連作で世に問うことが多いので、や、一句としての独立性、結晶度が薄く惜しいと思っていたが、今回は意欲が技巧を凌駕している。

選 後 に

寺 尾 俊 平

きわめて多い作品と相対するときの印象は孤立無援の思いにかられる。病後の私にとって今回の選句作業は晦渋を極めた。繰り返しくり返し選考はなにか無意味な徒勞を思わせた。それにしても今回の作品集は砂漠を見つめる焦点の絞れない瞳孔のような思いにかられたのは事実であった。

かつての応募川柳にはなにか、新鮮な果実を思わせるもの、未来を感じさせるものがあった。時代が変わったのかなにか平凡な劇画のストーリーを読むような印象の句が実に多かった。しかし、その中でもいくつかの明日を夢見させる作品があったのは、選をさせていただくものの冥利かなと考えた。とにかくこの欄を書くときの気持ちは、ああやっぱり今年がきていたと実感する。

いま川柳はブームといわれる。そのことの否定、肯定は別としてその中から、かならず私たちの待望する作家が出現するにちがいないと夢を見ている。

今回の特選として、なかはられいこ、さんを推した。

○昔小さな祭りがあって君生まれ
○テロップの地震は遠く林檎むく

○まほろしの蝶いて曇る窓ガラス
彼女のおつけらんとした心情は、私の時代とは大きく掛け離れている。なにかキューンとした感情からかも知れない。いずれにせよ自分の本質を失わないように、妥協しないように頑張ってもらいたい。

秀逸の三人の作家もじつにユニークだと思つて推薦した。

梅崎流青君の作品もかなり個性が強い。そして洒々とした作品は彼の独壇場であらう。

○仏壇の後ろで水の音がする
本多洋子さんの作品は自分の思いを自在に表現する。貴重な作家である。

○猫語を聴いている如月の闇

秀逸③ 西秋 忠兵衛

実力は周知の通りである。句の切れ味はピカ一であろう。句姿がすっきりしていて純度が高い。問題意識もある。只、難を言えば、句の浅さであろう。それは自分の内面の覗き込み方が少し薄いという所である。今回はいい作品が沢山揃った。今後益々期待。

・月光をつくっているステンレス工場

・原爆図の水をとりかえねばならぬ

・鍵かけて紫陽花を出るかたつむり

佳作の一位に普川素床を推した。今後を楽しみにしている。益々のご研鑽を。

以下選外佳作で心に残った作品。

子を宿すその日が母の誕生日

空は晴れているのにふえる水たまり

貝の身や一日一句砂吐いて

羅生門この世の側に降るさくら

また鳥になり損ったカップメン

コンサートホールの中の夜光虫

洗面器の底にわたしの始発駅

咽喉笛で止まったままの現住所

一對の碗 うす味の人口論

パントマイムと静かに暮れてゆく雪野

眞里子 文音 千絵 すみ子 幸子 草柳 幸夫 政旗 紀子 篤

柴崎昭雄君の作品にあふれるものの思いも貴重である。君らの時代が始まっている。

○動脈静脈道化の月は褪せゆくか

佳作の作品群にはそれぞれ個性のある作家を推薦した。

川柳作家の若返りを念じて若い作家を期待したが残念にもその目的は達し得なかった。しかし、私たちは失望、落胆はしていない。

斧田千晴さん、後藤理恵さん、矢島玖美子さんらにあしたへの期待は大きい。

川柳を書くということは定年がきたとか、家事から解放されてから始めるケースが多い。

したがってそうした年齢層が多数を占める。そのことから、ああ、年寄りの文芸、と一口に片付けてしまう傾向が、どの町でもどの村でもみえる。ただ、その場合に川柳の経験だけを看板にして、そっくり返っている人が意外と多い。逆に齢をとって始められても初々しい言葉と表現の発見をしている方も多いのも現実である。惜しくも選外になられた方にもそのような作品が多数にあった。川柳は今飽和時代の中にあるともいわれている。どうかみなさん頑張ってください。

比喩のきらめき

岡田 俊介

今回の応募作品は、充実した作品が多かったように思う。川柳が長年に亘って作り上げ、築いてきた概念を、表現の上でも内容の上でも凌駕する作品に出会いたいというつも思が、上位に推薦した作家たちは、それぞれのオリジナリティを持って、自分の世界を掘り進んでゆくことにより、川柳の概念をすこしずつ広げている。

中でも、表現と内容の調和がとれ、確固たる自分の世界を詠む金山英子さんを選とし、独特の語り口で、なつかしい世界を描く大谷晋一郎さん、感受性豊かな作品が並ぶ島道代さん、鋭敏なイメージを惜しみなく作り出している清水かおりさんを秀逸とした。

金山英子さんの現実感と思いの世界にゆれ、作品の中で旋回する文体に加え、比喩の魅力を熟知した表現は見事という他はない。「十三詣りの子は はなびらはその昔」の

句のはなびらの陰喩にみる切なさ、はかなさ。訴えかけてくる作品主題を持ちながら、余韻を失わず、作品にゆとりさえ感じられるのは、空間の広がりや大切にしたい表現を心掛けているからであろう。

大谷晋一郎さんの今年の作品は、なつかしい風景を切り取ってきたような独特の世界にさらに磨きがかかっている。今回は特に肩の力が抜けていて、とつとつとした詠いぶりに、自由さが感じられ、佳句に仕上がっている作品が多い。

島道代さんの触れれば壊れる感受性の豊かな作品が、比喩の安定度を増してきた。素直な感情を作品化して、寂しさと雪の冷たさが読後に残る作品である。

清水かおりさんは、鋭敏なイメージの創出と斬新なオリジナリティを兼ね備えた本格派としての魅力がある。「水牢をぬければ」の屈折したイメージなど得難く、表現の固定し

ない瑞々しさがあり、既成の川柳概念を広げているのはたしかである。

野沢省悟さんのオウム残像は、奇異の世界を奇異に終わらせず、余情をもって作品化している。テーマの好き嫌いとは別に、作品の深度は深い。

その他感銘を受けた作品を次に挙げる。

○ 黒水仙少年少女一輪車

秋男

雨の日は蕾のように膝抱いて
ブロンズの腰の細さに降るみぞれ
迷いこむ水の匂いのする部屋に
化粧水ぼろぼろと秋ひろがる

眞里子
和香
ちえみ
はる香
朱夏
華乱
逸星
素床
紀子
弥子
州花

掌にのせて今日一日を風葬す
老いてゆく名画館まで旅をして
白くろろが啼きだした鏡の間
死生観朝な夕なをしくしくして
落ちていたコトバを焚くと霧になり
降るならば雪と思し男の忌
深深と天おりてきて吹雪いている

州花

椿の実を推す

橋高 薫風

賞と名の付く選考にはいろいろの方法がある。複数選者の投票による点数の合点制は、結果明確で誰しも納得の出来る方法であるのだが、私の場合、高位に推した作品の受賞したためは今迄に一度もなく「空拳を如何せん」の思いを常に味わっている。今年は近畿の作者の作品に充実を感じたのだが、結果はやはり果してという気のしないこともない。

この時期になるとストレスの塊を自覚するのである。作品の三十句を一つのテーマで固めることは訴求力が高められて良い。今回では野沢省悟氏の「霧の疼みに―オウム残像―」と高橋かつき氏の「阪神大震災」などがあった。その充実ぶりに敬意を表す。

木本 朱夏

絶叫の固まっている椿の実

椿の実の美しい本態は、紅椿の鮮烈な絶叫の色だと言う。自らの心象が見事な焦点を形

つくって提示されている。

死者を送る花が競っているではないか
花というものは元来こういうものだということ
を豊饒の世のいよいよ華美になる葬送の
場に眼を据えて言っておせた。「微笑みの」
「歯の治療」など軽みの句にも引かれた。

山本 礫

クラークゲープルより年上になりました
アメリカ映画の全盛期、重厚な二枚目の役
で二世を風靡したマスクが眼前に浮んでくる
われらの時代の追憶を通しての老いらくの
現実感だ。

何処で果てるのだらう寒々と地酒

梵鐘の疚いくつある冬の寺

山頭火ふう述懐も、渴いた色の釣鐘の疚も
老境の作者の實在感であろう。鐘の疚の数を
鑑賞者は何と見るか。煩惱か、悔恨か。

海堀 酔月

みの虫の瞑想尺取虫の行

坐禅のみの虫、寒行の尺取。その悠揚な、ひたすらな。

ハッケヨイハッケヨイと結界を越える
政も官も財も、ノコッタノコッタの掛け声
で、住専問題は末期症状となっていました。

西秋 忠兵衛

いわし雲めくれば只今準備中
吊革を放すと地球から落ちる

「鍵かけて」「露天商」の句にも注目した。これからの句を先取りした感触に思える。カリカチュア的内容も明るく、世紀末から来世紀への指向を示唆された。

選外の作者と作品

(こども女性の作者の方が多かった)

そしていまも飯を欲しがらる仏たち

千秋

産み終えたかたちに百合が身をひらく

草柳

一日の力を抜いてバジャマ着る

なほみ

東京の雪のみつともなきの中

玖美子

湿原を人は魚形で彷徨えり

かおり

ある選後感

片柳哲郎

私はこの応募作品の前に、出来るだけ心をむなしくして読みつづけることを計った。心を空しくして読むことによって、応募作家たちは私の知らない創造の世界を開いてみせてくれた。ひたすら自分をみつめて或る真実を語ろうとする作品、または客観視した現代的なイメージの交叉した作品、大地の愛を信じて描かれた作品、それらが一読者としての私の作家精神と響きあうことを覚えたのである。Z賞は30句の巧拙を決める作品賞というより、その30句の川柳文学思想を掲げる作家賞であろう。しかも新進作家の栄冠の門であって欲しい願いが私にはある。

島道代氏の作品は、そこに立ち停まらざるを得ない内容のものばかりであった。昨年度も強く推した新進作家であるだけに、今年の出稿に落差の出るのを恐れていたが、危惧に終わった。思考も立派だし、しっかりした叙法で月下の共鳴があった。この人の作品の内

部には、精神的な一つの壁があって、その壁を超えようとする死の軽さが拡がってくるような、そんな怖しさを持っている。その危うい吊り橋を、杖一本で渡ってゆけるのもこの作家が持っている不思議なカタルシスの故であろうと思う。

樋口由紀子氏のやや粗野な筆致の魅力で縦横に走るアイロニー。つまりこの人は或る事象を「簡単に書くことの面白さと凄さ」で提供している。本年度はその成功を覚えた。

清水かおり氏は新しい抒情と、宿命とも考えられる川柳の持つ韻律を、美しく表現して見せる希有な作家である。燃え上がる韻律と音感を阻害するような汚れた句語は、容赦なく捨て去ることの出来る人であろう。

金山英子氏のリリズムは、不幸な人間たちの演じる滅びの美しさが、その構成の中で切実な思いで秘められていた。事実は関西大地震に直撃された非力な母子像、そのもので

選後感

八坂俊生

〈特選〉高橋かつき作品。『Z賞入選作品集』を読み返して、私は第十一回でも、かつき作品を選選に推していることに気付いた。その選後感で、「感受性の豊かさを感じさせ、そこから生まれた言葉が一人の女のナイーブな内面を形象化している」と評している。また第十二回では佳作に選り、「やさしさというものが感じられる。『してあげられることは一緒に雨に濡れること』という句があるからではない。やさしさと哀しさは隣合わせであることに作者は気付いている」と書いている。今回の応募作は阪神淡路大震災に遭遇した時に詠んだ作品群である。単なる震災の報告ではなく作者の思いの記録となっていて私の胸を打つ。

〈秀逸①〉和泉香作品。平凡な言葉で日常生活の一瞬を表現しているのだが、一日一日を大切に生きている作者の姿が見えてくる。言葉が作者の思いと不可分の関係にあるから

だろう。

〈秀逸②〉梅崎流青作品。第十三回応募作ほどの迫力を感じられなかったが、言葉はやはり重い。そしてその重さは作者の思いの重さである。流青作品もまた、言葉と思想が不可分の関係にあるのだ。和泉香と梅崎流青との言葉の違いは、思いの違いに発するものであり、それ故に個性的なのである。

〈秀逸③〉鷺谷美津子作品。「分刻みみなせいいっぱいの顔」「楽しかったんだね小さな靴に砂」のような句が、もっと欲しかった。川柳は今まで気付かなかった「自分」を発見したときに成立する詩であると言ってもよいのではないかと私は思っている。「せいいっぱいの顔」や「小さな靴に砂」を発見したとき、作者はそれに心惹かれていた自分を意識したことだろう。

〈佳作①〉坂東乃理子作品。「待つことをおぼえて犬は犬になる」「被災者の三兄弟が

あろう。しかし私はあくまで創作としての構成を視る。この作者がその構成の中で何を訴えたかったのかを掲げたいと思った。事務局の指示もあり、30句構成としては選外としたが、個々の作品として特に私の胸に響いた18の佳品を次に挙げて賞揚する。

布を裂く音の辺りへ歩き出す 俊太郎
秋桜の群れから帰らない妻よ 仁
五感から先をアスファルトが埋める 修
迷いこむ水の匂いのする部屋に ちえみ
赤い実を食べる童話のある限り スミ
モノクロの記憶の中に魚跳ねる 幸子
交番を通りすぎると今日になる 逸星
てのひらを重ねて聞かされたひとつ 千晴
鉛筆は錯覚の橋渡って行く 千絵
生きていてほしい時雨でいてほしい 磔
春は始まる赤い鳥居の次からつき 政旗
更に聞あおい堂を追いつめて すみ子
言い切つて唇うすき雪明かり 阿衣
魚を裂く赤にまみれるぼたん雪 草柳
石積み唄男がぼとり女がぼとり 雪洲
落ちぬという口紅重し地下茶房 けい子
ピアノ連弾黄の点滅を繰り返す 京子
陽炎や深き傷口より立ちぬ 文明

飼ううさぎ」「死ぬ前に逃がせなかったかぶと虫」「木枯しに猫ふくらんでふくらんで」などの句に坂東乃理子独自の世界を感じた。以下心に残った句を一人一句ずつあげておく。

くつきりと影ある蝶は憎きかな れいこ
生きていく分なら足りる小銭入れ 恵
一緒に暮らす人あり 窓を拭く 和子
戦争のない空自転車の真上 忠兵衛
カラーにはないモノクロのリアリズム
街路樹が何本狂う葉芽花芽 小吉
誰にでも好かれる人よきようなら 弘子
砕氷船が行くバファリン効いてくる 玖美子
死は時に近くにあって青磁色 禎子
生ぬるいトマトを齧るヒロシマ忌 裕見子
朱夏

個性を求める荒野へ

佐藤 岳 俊

世は住専とエイズで、その矛盾の泥でもがいている。Z賞の世界も、現代川柳の流域の一つとして集積され、個性の渦を凝視しつづけた。川柳作品に投入された世界に接した。

特選 大友 逸星

- おじさんに伝説があり血洗う
- 血液がほしくて並ぶ兵馬俑
- 鮫鱈の吊し切りなら金木町
- 公園に悲しい犬は来ていない

社会の美しい舗道を歩きながら、人の背を凝視しつづけている。自己を貫く明るさが、批評精神となり「おじさん」「兵馬俑」「金木町」「犬」等に吹きつづけていた。

秀逸① 塩釜 篤

- 暁の旗を立てると行く雪野
- 積もりくる雪へ嫉妬のありつたけ
- くれないの水になるまで蛇行する

川柳も又自己確立への姿なのだが、常に荒野へ向かう精神があふれ、カビのある言葉を

避ける目が働いていた。新雪の匂いがある。

秀逸② 柴崎 昭雄

- かげふみをして昏れ残る父の踝
- 閉ざさるる柵のすきま花日和
- 母の寝息よ 霧の芒は身の丈に
- 闇ばかり見て来たじゃがいものかたち

父母の姿が縦糸にあり、クロスする自己の世界を横糸に求め、探究しつづけている。そこには生き方の野が広がっていた。

秀逸③ 鎌田 京子

- 紙コップほどの軽さよ人が逝く
- 失意の底で煮込みうどんを吸ってる
- すれ違う風のかすかな摩擦音

日常の風から、自分の世界を切り拓く目が光っていた。精神のこまやかさでもある。総じて個性を求める新鮮さが希薄であった、つまり汚れている言葉があまりにも多く、自己を貫いた川柳作品の背に流れていなかったのである。心に残った佳作を次に掲げる。

選 後 評

(あるこだわりの背景)

酒 谷 愛 郷

創作者の多くは映像を形象化する際に、多少なりともある種の「こだわり」と常に向きあっているとも言える。そして人によって、できればその「こだわり」を棄てられるものならば棄てたいと、苦慮することもある事実である。しかし翻ってみると、その「こだわり」こそが反面その作者の創作意欲を支えつづけた礎石とも言える。今回特選に推した板東弘子さんも、常に亡父母の詠出に執心し、自己の作家としての位置を確認し続けている。

特選 板 東 弘 子

- 絮吹いてふいて女の凄しかり
- 指鳴らす寒い線路も向日葵も
- 桜三里は皆根をもつ父の忌よ
- 風の宴かやいちめん芒頼りなや

今回の作者には、一、二作品のように、何か向日性の気分さえ窺わせながら、一句目「(凄しかり)」を「(凄しかり)」と読ませて、心根の潔さをも内包させ常套を制す。また

三句目「皆根をもつ」の叙述は作品の核となして、安易に桜の根や恨みでもない読みの深い波及を宿す。四句目「頼りなや」は「(便りなや)」とも読ませ個々の作品の短絡な読みを避ける。

彼女にとって自己表示とは、けっして置かれた不幸に涙することではなく、自分が愛しいからこそ今日を生きる・・・現状に臆することなく、せめて詩精神はもって自在に遊ぶことこそ、彼女にとっての創作の意義と、精神救済であると信じる。

秀逸(1) 柴崎 昭雄

- 母の寝息よ 霧の芒は身の丈に
- 幽明の生身はのかに振動す
- 淡雪しきり わがへその緒に火照るもの
- 花図鑑はげしく抱擁するものよ

昭雄作品も自己の精神世界の表白に「(拘り)」ながら、北の凜冽の地に病苦と闘い、常に生命渴望の詩を読者に差し出す。母は子に、子は母の寝息をうかがう。明日の少しの

静逸をと祈る・・・作品の撓やかさにはやや欠如するものの、清澄な作品のリリシズム。作品の生まれた背景を思い知るとき情趣を増す。

秀逸(2)の大友逸星さんと秀逸(3)の田村拓郎さんは初参加。逸星作品「こうもりで突いて廻る雨の家」「自転車をこいで大きな町にする」等の軽妙にして洒落た語り口はとてこちよい。また拓郎さんの「ひとりふたりと夜毎鳥居は起こされる」「もっともつと石投げる手が燃えている」には他には無い詩心をみせて今後に期待できる。佳作では清水かおり、みとせりつ子さんの作品にまだ傷はあるものの、見えてくるその感性に刮目できる。

その他の作品を掲出する

- | | |
|------------------|-----|
| 助を貫くコップの水がとても凶暴 | 勝 郎 |
| 木にあれば木に生獄の月抱かな | 英 子 |
| 広辞苑薄暗がりて人臭き | かおり |
| まこと父の子水こぼれども啜うのみ | りつ子 |
| 影絵遊び 我が指先の人ざかり | 陽 雪 |
| 夢はこの先雨乞いの輪に残る | 英 一 |
| 人間でありたし愉快なる背伸び | 初 音 |
| 直線はみな曲げられて都市の葬 | 眞里子 |
| 空を吸うかごめかごめと夏めぐり | 道 代 |

- | | |
|--------------------|-----|
| 庭に来る産んだおぼえのある小鳥 | ちえみ |
| 原爆図の水をとりかえねばならぬ | 忠兵衛 |
| 身を投げるには今夜あたりの雪の嵩 | 州 花 |
| 絶叫の大地鎮めん北は雪降り | 眞里子 |
| 針葉樹林からときどき洩れる哄笑 | めぐみ |
| 散骨のように雪舞う村の葬 | 和 香 |
| 割れそうな壺から音が寄ってくる | みちこ |
| 羊水のことは触れぬ母の遺書 | 美和子 |
| 少女老いてハルマゲドンに裸身さらす | 省 悟 |
| 勃起してどつと明る製本屋 | 弥 市 |
| きゅーんと鳴る胸のボタンをつけかえる | 文 音 |
| ほんとうの訣れの後の蒼い空 | 時 子 |

難しい価値の数量化

以前にも書いたかもしれないが、現代川柳の評価が、古典的な裁断批評（外的他律的批評）ではカバール切れないことは、すでに常識になっている。一定の評価基準や標準的観念が否定される現在の作品には、坪内逍遙のいう「（没理想）批評」を採らざるを得ない。

これは、批評家の主観に依存するもので、作品から個人的に直接享受しうる実質を批評の対象とするから、十人の評者がいれば、十種の価値判断が生まれることにいささかも不思議はないし、現実にもそういう結果が出ていることは、毎回見られる通りである。

十九世紀にウォルター・ペーター（英）が唱えた「印象批評」は、作品への感情移入を専らとする、いわば同化批評だが、日本ではそれより七百年も前の《古来風体抄》（藤原俊成）にその態度が現れている。

だが、これはもとと優劣判断を伴うもの

ではなかった。主観の広狭深淺が個々の評価を左右する追体験的批評は、鑑賞を旨とするもので、既存の客観的基準に照らして、作品間の優劣を判断することとは相容れない。

Z賞の銓衡者は、この両方を強いられる形になる。作品から得られる、それぞれ質の違った印象に、順位づけをしなければならぬ。これは、第三者が想像する以上に、つらい営為である。

イマジネーションの世界を、客観的に数量化しなければ、順位はつけられないが、そのための最後の拠りどころは、「技術」しかない。つまり、形式と内容の間にはたらく原理を、価値観に置き換えるといういわば苦肉の方法で、私は、それを採った。いや、採らざるを得なかった、ということを告白するにとどめ、今回にかきり、個々の推薦作品や、選外作品についてのコメントはおゆるしいただきたい。

幽幻

神戸市 金山 英子

絶叫や花の真下の激震地区
盛り桜は喪中にて候 震度7

平成七年一月十七日午前五時四六分、あの
 忌しい阪神淡路大震災より一年数ヶ月を経
 た。

雪が、炎の粉が舞う中で生きたのか、生かされたのか、悲しみと葛藤の中で終りのない私の旅路が始まった。

水や物質に我れ先にと並ぶこの落胆の中に在りて一番強靱だった草木や根を愛おしみ、人間の非力と儻さを痛感。この宇宙さえも征服しようとする現在であり乍ら。今回の応募に際して躊躇と勇氣が可成り要りました。が私には柳友が居る。川柳がある。今日から明日への苦境の中で枝葉や幹を支える強靱な根になり、生への証の一步を刻んで行きます。

吐ってくれる先輩と家族

青森県 柴崎昭雄

川柳という道を歩き続けて自分は本当にこれだけで良いのかと思うことがあります。歩き続ければ続けるほど、登り坂があったり下りがあったり、そして色々な岐路や凸凹道。その都度川柳という道の厳しさを痛感しました。しかし、それはこれからの道を考えれば大した問題ではないのかも知れません。一歩ずつしっかりと進まなければ吹き飛ばされてしまうと思っています。この度の風炎賞を機に、更にしっかりと前を向いて進んで行こうと肝に銘じたいと思います。

そして一つ言えることは、今の自分があるのは私を叱ってくれたり励ましてくれる先輩と家族に恵まれたということです。そのことに感謝するばかりです。自分一人の力とはとてもちっぽけなものです。

選考委員の先生方、そして事務局の方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

佐藤岳俊選

[illegible]

西条真紀選

[illegible]

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選
玉木柳子	本多洋子	菊地俊太郎	柴崎昭雄	斉藤はる香	樋口由紀子	大友逸星	渡辺和尾	樋口仁	なかはられいこ	柿木英一	普川素床	西秋忠兵衛
郡山市	松原市	東京都	青森県	小樽市	姫路市	仙台市	愛知県	四日市市	名古屋	大東市	市川市	八千代市

吉田健治選

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選
岩崎眞里子	松永千秋	大谷晋一郎	斉藤はる香	みとせりつ子	野々圭子	野々圭子	野々圭子	野々圭子	金山英子	広瀬ちえみ	野沢省悟	西秋忠兵衛
黒石市	福岡県	高松市	小樽市	高松市	和歌山市	和歌山市	和歌山市	和歌山市	神戸市	仙台市	青森市	八千代市

秀逸	秀逸	秀逸	特選	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選
柴崎昭雄	本多洋子	梅崎流青	なかはられいこ	岩崎雪洲	吉田州花	岩間トキ	斉藤茂生	高橋かつき	河瀬芳子	広瀬ちえみ	峯裕見子	樋口由紀子	坂東乃理子	横村華乱	西秋忠兵衛	海堀酔月	山本朱夏
青森県	松原市	柳川市	名古屋	黒石市	青森市	網走市	青森市	西宮市	高槻市	仙台市	大津市	姫路市	加古川市	岡山県	八千代市	堺市	京都市

寺尾俊平選

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
坂東乃理子	西海枝みちこ	矢島玖美子	吉田州花	後藤理恵	横村華乱	板東弘子	木本朱夏	斧田千晴	西秋忠兵衛	前原勝郎	金山英子	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
加古川市	福島市	東京都	青森市	和歌山市	柏崎県	香川市	和歌山市	大垣市	八千代市	津山市	神戸市	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選
戎岩崎眞里子	芳賀弥市	柿木英一	島道代	乙黒初音	大谷晋一郎	福井陽雪	みとせりつ子	清水かおり	金山英子	前原勝郎	田村拓郎	柴崎昭雄
青森県	黒石市	仙台市	大東市	青森市	高松市	青森市	高松市	土佐市	神戸市	津山市	土佐市	仙台市

酒谷愛郷選

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選
清水かおり	岩崎眞里子	吉田三千子	矢島玖美子	高橋かつき	梅崎流青	柳川市	西宮市	東京都	名古屋	黒石市	土佐市	土佐市

秀逸	秀逸	秀逸	特選	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選
鷺谷美津子	梅崎流青	和泉香	高橋かつき	長井すみ子	加藤かず子	伊藤紀子	大橋政良	菊地俊太郎	峯裕見子	樋口仁	高橋素床	普川素床	大友逸星	柿木英一	辻スミ	なかはられいこ	海堀酔月	
秋田市	柳川市	滋賀県	西宮市	福岡県	札幌市	苫小牧市	砂川市	東京都	大津市	四日市市	札幌市	仙台市	大東市	和歌山市	名古屋	堺市	松原市	

八坂俊生選

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
吉田州花	板東弘子	福井陽雪	柴崎昭雄	伊藤紀子	前原勝郎	樋口由紀子	清水かおり	金山英子	島道代	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸
青森市	香川市	青森市	青森市	苫小牧市	津山市	姫路市	土佐市	神戸市	青森市	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
坂東乃理子	なかはられいこ	岡本恵	東川和子	西秋忠兵衛	島小吉	板東弘子	矢島玖美子	野村禎子	峯裕見子	木本朱夏	戎修	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
加古川市	名古屋	水海道市	伊勢市	八千代市	東京都	香川市	東京都	北海道	大津市	和歌山市	青森市	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作

片柳哲郎選

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
金山英子	島道代	清水かおり	樋口由紀子	前原勝郎	伊藤紀子	柴崎昭雄	福井陽雪	板東弘子	吉田州花	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸	秀逸
青森市	神戸市	土佐市	姫路市	津山市	苫小牧市	青森市	青森市	青森市	香川市	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作

川柳 Z大賞受賞者

- ①第1回 昭和58年「1982（昭和57）年度」 細川 不凍（北海道）
- ②第2回 昭和59年「1983（昭和58）年度」 酒谷 愛郷（伊万里市）
- ③第3回 昭和60年「1984（昭和59）年度」 古谷 恭一（高知市）
- ④第4回 昭和61年「1985（昭和60）年度」 西 山茶花（岡山市）
- ⑤第5回 昭和62年「1986（昭和61）年度」 海地 大破（高知市）
- ⑥第6回 昭和63年「1987（昭和62）年度」 桑野 晶子（札幌市）
- ⑦第7回 平成元年「1988（昭和63）年度」 金山 英子（神戸市）
- ⑧第8回 平成2年「1989（平成元）年度」 長町 一咲（岡山市）
- ⑨第9回 平成3年「1990（平成2）年度」 西条 真紀（岡山市）
- ⑩第10回 平成4年「1991（平成3）年度」 加藤 久子（岩沼市）
- ⑪第11回 平成5年「1992（平成4）年度」 石部 明（岡山県）
- ⑫第12回 平成6年「1993（平成5）年度」 吉田 浪（岡山市）
- ⑬第12回 2作家 荻原久美子（東京都）
- ⑭第13回 平成7年「1994（平成6）年度」 渡辺 和尾（愛知県）
- ⑮第14回 平成8年「1995（平成7）年度」 金山 英子（神戸市）

風 炎 賞 受 賞 者

- ①第1回 平成5年「1992（平成4）年度」 荻原久美子（東京都）
- ②第2回 平成6年「1993（平成5）年度」 佐藤 岳俊（岩手県）
- ③第3回 平成7年「1994（平成6）年度」 なかはられいこ（名古屋市）
- ④第4回 平成8年「1995（平成7）年度」 柴崎 昭雄（青森県）

【変更】 第15回川柳 Z 賞作品応募要領

【応募作品】創作30句を12組（10名の選者・事務局・校正用）

1996（平成8）年発表作品か未発表作品（原則）

【締 切】1997年1月31日消印まで

【選考委員】

細 川 不 凍（北海道）	佐 藤 岳 俊（岩 手）
尾 藤 三 柳（東 京）	吉 田 健 治（東 京）
片 柳 哲 郎（横 浜）	岡 田 俊 介（大 阪）
橘 高 薫 風（大 阪）	寺 尾 俊 平（岡 山）
八 坂 俊 生（香 川）	酒 谷 愛 郷（伊万里）

【応募用紙】B4専用紙。ワープロの方は専用紙に準じて下さい。用紙の必要な方は、返信用封筒を同封の上事務局まで。専用紙以外（や感熱紙）での応募はご容赦下さい。

【参 加 費】不要です。が、入選句集希望の方は¥1,500（送料発行所負担）を振替など（切手・券不可）でお送り下さい。

【速報・5月予定】

参加者で希望の方は、受取人の住所氏名入り返信用官製（に限ります）ハガキを応募時に同封して下さい。

【 賞 】大 賞	15万円と津軽塗り記念楯	1 名
風炎賞（奨励費として）	津軽塗り記念楯	1 名
優秀賞	テレカ	若干名

【送付と問い合わせ先】

030-13 青森県蟹田町145

川柳 Z 賞事務局 FAX 共・0174-22-3537

【振替口座名】川柳 Z 賞 【口座番号】02350-5-2718

★Z賞テレカ（50度）を¥1,000（送料共）でお頒けしています。

★応募者名は発表しません。

●事務局より

選者のご奉仕による、第14回入選作品集をお届け致します◆15回の応募要領の一部が変わりますのでご注意ください◆一点を取るのも難しい賞ですが、次世代を目指し思い切った作品をお寄せ下さい。Z賞はそういう「川柳広場」を願う10名の選者の方々にも続けてそうお願い申し上げます◆校正にT雄氏とM子さんご夫妻の応援を戴き、編集は天地聖一さんのご苦勞に変わり、みなみのさんのご協力を得ました。（杉野草兵）

第十四回川柳 Z 賞入選作品集

発行日 一九九六年八月十二日
 編集人 南 野 通
 発行人 高 田 寄 生 木
 発行所 川柳 Z 賞選考委員会
 〒030-13 青森県蟹田町一四五
 ☎〇一七四-二二-三三三七（FAX共）
 振替 〇一七四-二二-三三三七（FAX共）
 領 〇一五〇〇円（〒共）
 振替 〇一五〇〇円（〒共）
 口座 〇二三五-〇一五-二七一八
 印刷所 青森コロニー印刷
 住所 青森市大字幸畑字松元六二二三
 TEL 〇一七七（三八）二〇二二